

異世界無差別配信ラジオTS之型

びんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- Q. 性転換してまでラジオやる理由って？
- A. 全世界に姉妹百合を見せつけるためです

目次

第八話	61
第七回	53
第六回	45
第五回	36
第四回	28
第三回	17
第二回	9
第一回	1

第一回

「ふう……これで準備は整ったか？」

少年が室内をぐるりと見渡せば、そこには数多くの機材がある。なんとなく使い方がわかる気がする見たことのある機材もあれば、どう使うのか予想することも難しいオーバーテクノロジーの塊まで。

わかっているのは、それらが全て配信用の機材としてこの物部学園に運び込まれたことだけ。

「えつと、おにーちゃん。これにゆうくんの力を流せばいいの？」

「ああ、聞いた話だとそうらしいな」

少年が隣にいる少女、ユーフォリアの言葉に頷く。

ユーフィーという愛称で呼ばれる少女が指差したのは、機材の中でも一際大きなものの一つ。

どういう機材なのか想像もつかないけれど、使い方だけはわかってるものの筆頭。

「不安か？」

「うん、ちよつとだけ……」

「気にするな。誰もこんなものに期待してない」

「そうは言っても……」

「うるさい」

「わふっ」

少女の頭を乱雑に撫でる。

物部学園生徒の希望を一身に背負ったことで、もとより嘘がそこまです得意ではないため緊張を隠せていないユーフォリアの頭を。

「お前は俺の妹なんだから、俺のいうことを聞いてればいい」

「むー……」

「返事は」

「はーい」

「よろしい」

かなり傲慢な発言。けれどユーフォリアは逆らうことはせずなんだかなあ、と苦笑い。

口下手ではあるけれど悪い人ではないことはわかっている。

今だって、「緊張する必要はない」「これをやるように提案したのは自分だから、失敗しても悪いのは自分だ」なんて言おうとしたのだから。

それがわかっているから、ユーフォリアも苦笑い程度で終わっている。

「……なんだ？」

「なんでもなーい」

「なら、とつとと始めろ。成功するにせよ失敗するにせよ、ユーフォリアがやらないとどうにもならん」

「うんー」

先ほどの緊張が解れた様子のユーフォリアが「お願い、ゆうくん」と呟きながら取り出したのは、彼女の髪色と同じ空色の槍剣プレイ済みの人にはお馴染み、永遠神剣第三位『悠久』である。今回のお話の役割は増幅器。だった。槍剣である。大事なことなので二回言った。必要なら何度でも言う。

「よいしょ、つと。ゆうくん、大丈夫？」

誰が見ても配信に使うなどとは思えない物騒な代物。

ユーフォリアはそれに話しかけながら、彼女の身の丈ほどある、優美な光を刃とするその武器に巻きつけるようにして大量のコードやケーブルを繋ぐ。

美しい大剣が、一瞬でタコ足配線一つのコンセントにたくさん繋いだやつ。埃が溜まっていることが多い。火事の元なので気をつけようのような有様へと早変わり。

それを横目に、少年も手元から燻んだ宝珠を取り出す。

少女が繋いだケーブルやコードの先、接続部分が宝珠の中に溶けていき、また別の接続機器が宝珠を中継機器としてパソコン、あるいはカメラなどの機器と繋がっていった。

最終的な様相を見てポツリと一言。

「……これ、本当に動くのか」

「……た、多分」

結果は、すぐに出た。

「動いた！」

「……驚いたな。この計器の文字が読めるのか」

「え、読めないよ？」

「……どうせそんなことだろうと思ったよ」

文字の意味は少年にもわからないが、計器盤の示せる針が限界をぶつちぎっていることだけは目に見えてわかる。

だから、目的を果たすための出力はちゃんと出ているのだと信じるほかない。

準備はできたと言わんばかりに、ユーフォリアは配信用のスイッチに触れて――

「……え？」

「どうかした、ユーフィー？」

少年の方を振り向いたところで、動きが止まる。

視界に映った光景が本当なのかどうかを疑いごしごしと目を擦っているが、その瞳が捉えるものは何一つとして変わらない。

「お……」

「お？」

「おにーちゃんが、女の子になってる……」

「……何言ってるのさ？」

そう、ユーフォリアの視界が捉えたのは、つい先ほどまで兄がいたはずの場所に一人の少女が立っている姿。

兄が女性になったらこんな雰囲気なんじゃないか、とそう思わせる少女。

自分の体を見て「おや、本当だ」と呟きながらぺたぺたと触っているの、この少女こそが兄であるとしてユーフォリアは理解する。

「まあいいさ。別に女になったからと言ってやるのが特段変わるわけじゃないからね」

「え？ ……え？」

「ほら、ユーフィー。配信を始めよう。この学園の生徒は皆待ってるわけだし」

「おにーちゃん、順応早くない?」

「配信の間は”おねーちゃん”、ね」

「むー……なんかあたしだけ焦ってるような気がする」

「焦ることなんて何もないよ。この配信は原作者が発想をくれたものだからね」

「配信の方じゃないよ。おにーちゃんは、もう少し自分の体に興味持とうよ……」

「ぼくが何もないうっていつてるんだから何もないさ。それに、配信するなら女の子の方が視聴者ウケは良さそうだし」

「それでも! ちゃんと、終わったら何が起きたのかは調べるよ!」

「はいはい。……それじゃあ、始めようか」

兄……姉? が何はともあれ、と配信を始めようとするので、ユーフォリアも仕方ないなあと思いつつながら目を擦るために離れた指を再度スイッチに触れた。

スイッチを入れるための言葉なんて古来から決まっている。

少女もまたそれに則り、口にしたのは「ポチツとな」という可愛らしい掛け声。

二人の生まれて初めての配信が、今始まる。

「あー、あー。マイクテスマイクテス。聞こえますかー?」

配信が始まるのと同時に、コメントが流れ始めた。

『え、何これ?』『俺たちは何を聞かされているんだ……?』『などなど、そこに見られるのは困惑の声が多い。』

「あ、聞こえてないってことはなさそうだね」

「えつと、申し訳ないんですけど、しばらくの間あたしたちに付き合ってくださいと嬉しいですよ!」

「まあ、付き合いたくないっていても、半強制的なものなんだけど……」

隣に来たユーフォリアを膝の上に乗せて、わわっと驚く少女にくすり笑みを漏らす。

「どういうこと、と見上げて来た少女の疑問を流しながら」……もうと口にする少女にアイコンタクトで合図をとって。

『それじゃ、第一回とわまじラジオっ！ 出力過剰でスタートするよ！』

『始めちゃいますっ！』

“ は？ ” “ え、なにこれ？ ” “ 幻聴聞くくらい疲れてるのか俺……休もつかない…… ” “ なんか耳んに響くわこれ…… ” “ ユーファイ……？ ” “ 始まってしまいましたか…… ”

それが届いたほとんどの人間が、ぎよつとして動きを止めた。

『えー、皆様はじめまして。あるいはこんにちは。それともこんばんは？ ……とりあえず、落ち着くまではちよつと待ちますねー』

数分、あるいは十数分、それくらいの時間コメントが一气呵成に流れる様を見届けて。

『はい、それでは気を取り直して。この“とわまじラジオっ！”は物部学園のとある一室よりお送りしております』

『配信そのものは無差別で、物部学園の生徒さんの御家族に届けるために出力を限界まであげてるので、聞こえてるほとんどの人は無関係だと思えます』

『この配信は魂そのものに届けるので、“見ない聞かない”は基本的には無理なんだ、ごめんね？』

そこに映り込んだのは、対照的な二人の少女。

一人は、艶やかな黒髪、黒曜石のような瞳、どこか愛嬌のある顔といった、どこにでもありそうなものが適度なバランスで組み合わさった少女。

美少女という称号がふさわしくはあるが、それでも探せば見つかりそうな程度の美人である。

もう一人は、流れるような空色の髪、紺碧の瞳、妖精を思わせる整った美貌といった、幻想の内におみ生息を許されるような美が緻密に組み合わさった少女。

美少女という称号がふさわしくはあるが、創作の世界にしか存在を許されないような美人である。

どちらか単体だけでも十分に「美人だ」と思えるような少女たちだが、二人揃うと余計に美人に見える二人だった。

『この配信は、永遠神剣第三位“悠久”の契約者、ユーフォリアと』
『高柳幸の美人姉妹でお送りするよ』

“自分で美人を名乗るか普通……?” “残念美人” “美人なのは認めざるを得ない” “なんかユーフィーに姉ができて……” “永遠神剣かあ……ならこんな謎の現象でも仕方ないよなあ……”

黒の少女は幸を名乗り、青の少女はユーフォリアと名乗る。

どう見ても姉妹には見えない二人に、脳内で見ている配信画面で一気にコメントが加速した。

見ている人間の考えたことがそっくりそのままコメントとして排出される配信では、こちらの方が普通かもしれない。

一部の人間が“永遠神剣意思を持つ武器。契約した相手にすつごい力を与える。剣じゃないことの方が多いのもっと自分たちの種族名を二度見しろ”という単語を聞いてこの現象に納得しているが、そんな真面目なコメントは押し流されてしまっている。

『おいおい、うちのユーフィーを見なよ。どこからどう見てもパーフェクトな美少女だろう? どうしてこの子を見て“残念”なんて言葉が出てくるのさ?』

『多分、言われてるのおねーちゃんだよ』

“妹に責任を押し付けるな” “あ、なんだか慣れて来たぞ” “これ……運転中の人とか悲惨なことにならない?” “ユーフィー、頑張ってる……”

『えっと、おねーちゃん。配信ってことだけど、何をするの?』

『雑談の予定だけど……学校だからゲームもないしね。今日のところは面白そうなコメントがあったら拾っていく、程度の話になるね』

“学校……?” “学校ってなんぞや” “そもそもユーフォリアには姉妹がないはずなんです……”

『お、ちようどいいコメントがあるね。どうやらユーフィーの知り合いみたいだよ?』

『え、本当?』

幸が指し示したコメントは、『ユーフィー、頑張ってる……』というコメント。

ちよくちよく見受けられるユーフォリアの知り合いのようなコメントの中にあつた最新のもの。

『いやあ、良かったような残念なような。ユーフィーの記憶が戻らなかったらうちの子になつてもらおうと思つてただけ……』

『……なんだかおねーちゃんがいつもと違う』

“配信であつぱらぱーになつたか” “無駄にテンションあげてもいいことないぞ” “黒歴史確定だろうなあ……” “俺たちの魂に変なの流してるんだからいい気味だ”

『あつはつは、酷い言い草だな君たち』

性転換しているのでもいつもと違うのは当たり前である。

とはいえ、そんなことは画面の向こうの人たちは知らない。

なので好き放題言わせて反論はしないが、このような事態を持ち込んだ人間には罰を与えねばならないだろう。

そう考えて、見ている人間が総じてヤバイと感じる笑みを湛え、幸がユーフォリアの耳元で「ユーフィーはあとでお仕置きね」と囁けば、擦ったいのか少女はぶるりと震えた。

“なんか妙にエツチ” “うつ……ふう……” “ほうほう……百合姉妹でしたか” “ああ……ユーフィーが変な道に……!”

『変な道とは失礼な。麗しき姉妹愛だよ』

『おねーちゃんと仲がいいのつて変なことなんですか……?』

“そんなことないよ(手のひらクルー)” “仲がいいのはいいことだよ” “この二人、一緒にお風呂入ってそう” “なんか幸ちゃんの手、やらしい……やらしくない?” “ユーフォリアちゃんのことを抱きしめてる手すらやらしいとか……” “ユーフォリアちゃんにそういう目を向けるのは解釈違いだぞ”

二人の性格がなんとなく掴めなかった視聴者たちも、ここまでくれば少し程度は掴めてくる。

ユーフォリアはこういうアンダーグラウンド的な話に対する知識

は一切なく、逆に幸はそういう話にもある程度はついていけそうだが、という程度には。

『あう……おねーちゃん、そろそろゆうくんが限界だ、って』

『ん……？　そうかい。なら、最後に一つくらい質問に答えて終了としようか。……お、そうだね、これにしよう』

“ 結局、これってなんだったの？”

『うん、そうだね。そういえばまだちゃんとは説明していなかった』

『これは、どこかの地球から消え去った物部学園から、その時に学園の中にいた皆の安全を家族の皆さんに知らせるための放送です』

『あとは、記憶喪失のユーフィーの家族にも運良く届けば、ユーフィーの記憶も戻るんじゃないかっていうのもあるよ』

『え、そっちは聞いてないですよ!?!』

『言っていないもん。……ほら、それはあとで説明してあげるから』

『絶対ですよ？　……次の配信日時は、まだ決まっています。物部学園と届いた場所の時間の流れが一緒でない可能性もあるので、次の配信の時に前回から何日経ったのかは説明しますね。それで、大体の時間の流れの差を考えてくれると嬉しいですよ』

『この配信は、仮称“ 未来の世界聖なるかな第5章舞台。『地球を発展させたような技術』が数多くあることでこう名づけられた” 在中、物部学園より、物部学園が敷地ごと消えた第1章参照地球へ向けてお送りしたよ』

「配信が、終わりを告げる。」

異世界から生まれ育った世界へと届ける、物部学園生徒の無事を伝えるための配信が。

彼らがいうところの『未来の世界』と別の世界を隔てる壁を超えて。彼らが求める『地球』に届いてもまだ止まらず。

その二つを含めた数多の世界が枝葉のように内包される時間樹という宇宙すら、この声が届く全域としては役者不足。

時間樹という宇宙すら飛び越えて、それが当然のように乱立する無限の宇宙にまで響き渡った二人の声は、そんな言葉を最後に途切れたのだった。

第二回

仮説で申し訳ないけれど、と女は前置きして口を開く。

「多分、これはユーフォリアちゃんの影響ね」

「え……あたしの、ですか？」

場所は物部学園の保健室。

配信が終わり次第駆け込んだユーフオリアを、物部学園で女医をしているヤツイータは当然のように受け入れた。

配信が届いたのは全世界。当然、保健室にいた彼女も『高柳幸が女性になって配信していた』という事実は確認している。

『悠久』の力を増幅させて、いろんな世界に届けるために二人が永遠神剣を繋いだでしょ？ あれで、幸くんが増幅させたユーフオリアちゃんの力の一部が流れ込んだのよ。ほとんどの力はラジオの配信範囲を広げるために使われたけど、余剰分が幸くんの体に入って幸くんの体を変質させたのね」

「長い、一言で」

「ラジオ配信してる間は女の子になるわ」

「実害は」

「……多分、ないはずよ。むしろ、ユーフォリアちゃんの力の影響で強くなってるかもしれないから、その分お得かもね」

「ならいい」

「ええ……おにーちゃんはもうちよつと自分の体を気にしようよ……」

「実害が出たらその時はその時だ」

ラジオを終えて部屋を出た時点で、幸の体は女から男に戻った。

戻れないのならばともかく、戻ることができれば考える必要もないと、ユーフォリアの心配も取り付く島もない。

……いや、あるいは実害は一つ出ているのかもしれないが、それは彼が口にしなればわからないこと。

ならば、彼が害はないとしておけば、このラジオを続けることは可能だろう。

はあ、と一つため息を吐いて幸は立ち上がる。

これ以上の会話で余計なボロを出してしまうのはごめんだ、と。

「あ、おにーちゃん待ってよー」

ユーフォリアもそれに追従するように立ち上がったところで、「あ、そうだ」と幸の背中に声がかかる。

振り向けば、どこかニヤついた表情のヤツイータ。

「別に」お仕置き」とやうに関わるつもりはないけど、エツチなことはやめておきなさいよー」

それに対する反応はあまりにも対照的だった。

ユーフォリアは顔を赤くしてちらちらと幸のことを見上げ、見上げられた幸はその視線を無視して阿呆を見るよう目でヤツイータを見る。

「え、えつちなのはだめ、ですよ?」

「十年早いわ」

「……むう」

そういう目で見られたかったかと言われると首を横に振るが、かといって即答で興味がないと言われるのもまた納得がいかない。

そんな複雑な乙女心を発揮しながら、歩き始めた幸のことをユーフォリアが追い駆ける。

「つて、おにーちゃんはおねーちゃんになつてる間の記憶もあるの?」

「……ああ、一応な」

「なら、なんでおねーちゃんだとあんな感じの性格になったのかわかる?」

「……知らん。記憶があるだけだ」

「何か分かつてる顔してるよ?」

「どんな顔だ」

「嘘ついてますーって顔」

追いついたユーフォリアが幸の横に並び、その手をきゅつと軽く握った。

にへら、と相好を崩して見上げれば、少年の顔は一瞬不快そうに顰められたが、振り払うことも離すように言うこともなく、少女の好き

にさせ始める。

「……若いつていいわねえ」

そんな光景を、こっそりとヤツイータは保健室から顔を出して眺め、思わずそんな言葉を呟いたのだった。

「あ、おねーちゃん！ あれ見て、あれ！ うわあ……可愛いなあ……」

「へえ……ユーフィーはああいうのが好きなんだね。でも、買うにしてもまずはやらないといけないことを済ませてからだ」

「わかってますよー、だ」

ユーフィーを連れて『未来の世界』の一角を歩く。この世界の通貨への換金は前日のうちに誰かが済ませていたようで、外に出る際に多少は持たされた。

少女が二人で歩いている、ということでもちよつと邪な視線を向けられることもあるが、そういう類はユーフィーに届くよりも先に目を小さな閃光で潰してしまうことで阻止している。

なんでまた女性体にならないんだ、という気持ちは少し前を歩く少女には見えないように。

はつきりと言い切れるわけではないが、女性体だと気持ちが行動に現れやすくなるようなのでこっそりと。

「ほら、おねーちゃん。早くいこっ！」

「ああ。わかってているさ。ユーフィーもわかってるだろうけど、君が一人で先に進んでも何も意味がないよ？」

「はい。……今日はおねーちゃんの服を買うんだもんね？」

「そういうことらしいね」

保健室から出て、あとは部屋に戻るだけ。そんなタイミングのことだった。

物部学園にいる女性神剣使い永遠神剣の契約者のことの一部から、『女性』として配信するならちゃんと着飾れ、と言われたのだ。

ヤツイータの口にした仮説が正しいのかどうかを確かめるいい機

会だといえはその通りなのだが――

「まったく、面倒なことだよ……」

思わず、そんな言葉を零してしまった。

とはいえ、これからのことを考えるならば彼女たちの言は間違っていない。

あのラジオには、すでに語った目的以外にも『広告塔』としての役割もある。

これから先渡る世界で、見知らぬ者として警戒される可能性を減らすという役割が。

そうした服装による印象の違いの実例も、目の前にいることだから余計によくわかる。

「あ、おねーちゃん！ あそことかどう？」

「どうって言われてもねえ。ぼくにはファッションはまったくわからないから」

「そっかあ……なら、見にいってみよう？」

「うん、そうだね」

たん、と軽やかに一人先に進んだ今日のユーフィーの服装は白いブラウスと黒のミニスカート。そして母親譲りの髪色が映えるような紺のフード付きのパーカーを羽織った姿は、まるで愛らしい小悪魔のよう。

一人でどんどん先に進んでいると言うのに、その少女の姿を見失うことはないだろうと確信できる、そんな姿。

学園の制服でなくなつた、というだけでこれほどまでにガラツと印象が変わるだなんて思つてもみなかった。

美しい空色の髪を風に靡かせながら花のような笑顔を浮かべ走る少女に、周囲の人もついつい目を取られている様子。

まあ、それも当然のことだろう。俺だって、こんなに可愛い女の子が笑顔を浮かべて走り回っているなら絶対に目を取られる。

もしこれで、俺が男の姿のままユーフィーと一緒に歩いていたら、なんて想像もしたくない。

「それにしても」

「……？　どうかしたのおねーちゃん？」

「いや、なんだかいつもより元気だなと思つてね」

「だって、この服の初お披露目だもん。普段は学校の中だから着られないでしょ。それに」

「それに？」

「おねーちゃんとの初お出かけだし」

「……嬉しいこと言つてくれるなあ」

頭を撫でれば、気持ちいいのか鼻歌を歌うユーフィー。

確かに、女の子なのだからお洒落できることが嬉しいのはそうおかしなことではない。

特に、仲間になってから『物部学園の一員である』ことを示す制服を着る機会の方が多かったユーフィーは、これが初めての私服でのお出かけ。

多少浮かれるのは仕方がないと割り切ったところで、少女の小さな手が軽くこちらの手を握った。

「どうしたのさ？」

「えへへ……離れちゃいけないもんね。あたしの手、握つててね？」

「はいはい」

手を握られたその瞬間から周囲の視線が生暖かい。

気恥ずかしさを感じながら、今までの世界とは違つてどことなく地球に似た様式のビルが立ち並ぶ通りを物色しながら歩き続ける。

「そういえばおねーちゃん」

「なんだい？」

「おにーちゃんの時はおねーフィーって呼んでくれないのに、どうしておねーちゃんだと呼んでくれるの？」

「……さあ、なんでだろうね？　おにーちゃんの時だと恥ずかしくて呼べないだけかもしれないし、おねーちゃんとおにーちゃんの間格はまるつきり違うからぼくの場合だけ呼ぶのかもしれないし。ユーフィーの好きにとつてくれて構わないよ」

「それくらい教えてよー」

「あははっ、内緒」

腕にしがみついて答えをせがむユーフィー。

その姿に、普段の真面目で礼儀正しい少女の姿は見られない。

なんというか、本当に見た目相応の少女を見ているようでホツとする。

「あれ……？」

「お？」

そうしてしばらく少女を一人腕にぶら下げたまま歩いていると、わずかに地面が揺れ始めた。

ユーフィーも感じたようなので錯覚というわけではなさそうだが、そう考えたところで、その軽い震動の正体が姿を現す。

「守護者、だね」

「そうだね……戻ろうか、ユーフィー。わざわざ刺激する必要もないんだから」

「うん」

現れたのはビルほどの大きさのドラゴン。

光を反射する白の鱗で体表の全てを包んでいるのは確か……『守護者エクルトア作中では一貫して守護者とか呼ばれない。多分、名前を覚えてる人は少ない。作者も調べるまで忘れてた。』だったか。

当然、『守護者』という名前の通り彼らは何かを守っているはずで、あのドラゴンが守っているのはおそらく“こちら側スラムのこと。一般人がスラムと言われて想定するような掃き溜めではない。後述するシテイを追い出された民の住む場所なので、普通の暮らしができる場所。”と“あちら側シテイのこと。上流階級の住む場所で、要するに金持ちの街。”の境界線。

ただ、それはそれとして――

「なんで異世界なのに、守護者っていう日本語があるんだろうね……？」

「そう言われてみるとそうだね……」

「ぼく達の世界での守護者に対応する言葉で呼ばれてるならまだしも、普通に守護者って呼ばれてるのは謎だなあ……」

眩きながら、これまでより早足でその場を離れる。

さすがにこんな事態になればユーフィーも俺の腕にくつついたままというわけにもいかない。

物部学園の誰よりも強い少女は、ドラゴンが何かの間違いで襲いかかってきたとしても問題ないように俺の背後に位置どっていた。

「……………どうしようか、ユーフィー」

ドラゴンが見えなくなった、戦闘状態を解除しても問題ないということを示すため、背後を振り向き少女に話しかける。

「どうするって……………報告するんじゃない？」

ユーフィーもまた、そのことを理解したのか肩の力が抜けて、戦士としての形から普段の少女へと戻った。

「いや、守護者の存在そのものはもうとつくに報告されているはずだよ。ぼくが言ってるのは……………」

ちらりと視線を向けた先にはブティックの数々。

いつの間やら、服飾の店の並ぶ通りに来ていたらしい。

「この大量のお店の中から、まずはどこに向かうのかって話さ」

後のことは語るまでもない。

ユーフィーの主導で俺が「ぼく」になっている間の服装を買いあさり、ついでにユーフィーの服装を買った、たったそれだけ。

「ユーフィー、今日買った服は、あとでちゃんとおにーちゃんの方に見せてあげるんだよ」

「え？ でもおねーちゃんと記憶共有してるんだから……………」

「こういうのは、男性に見せる方が多少は恥ずかしくて」お仕置き“になるでしょ」

「あ、お仕置き”ってことなんだ。……………おにーちゃん、可愛いって言うってくれるかなあ？」

「大丈夫大丈夫。可愛いって言うかどうかはともかく、そう思うだろうってことはぼくが保証するよ」

気がつけば、街にはいつの間にか夜の帳が下りていた。

今回街に降りた本題は『ぼく』の女性服を買うために。あとはおまけでラジオで放送する内容を探して、と言ったところ。

もう、本題の目的を達成したのだからこれ以上街に降りている必要

はまったくない。

そう思つて、「ほら、帰ろう」とユーフィーに手を差し伸べたところ
で――

この世界の最たる特徴である、“それ”は起こつた。

「お、おねーちゃん……」

「ん？」

「この世界の人の様子が……」

ユーフィーの言葉を聞いて周囲を見渡し、彼女が怯えている理由を
理解する。

周囲の人間の瞳から光が消え、先ほどまであつたはずの気配もまた
同様に。

顔の表情も消失し、生物からただの物体に転身した“それ”らはふ
らふらと幽鬼のように、けれど迷いなく歩き出す。

生气すら感じさせない様子の男女全てに共通するのは、この世界の
住人であることだけ。

（ああ、あれか）

そんな謎の現象に当てはまるものを、自分が持つこの世界の知識の
中から引き出した。

「どうする、ユーフィー。誰かの後を追ってみるか？」

「……追ってみましょう！」

「なら誰を……って、あの人」

「あ、さっきのブティックの人です！」

顔を見合わせて頷いて、二人で追いかける。

急ぐ必要はないが、のんびり歩いていけば置いていかれそうな速
度。

その女性が止まって、生氣を取り戻したところで隣にいるユー
フィーが不審がる程度には慎重に声をかけて――

「おや、どちら様で？」

そうして俺たちはその現象……リセットが起きた瞬間に立ち会つ
たのだつた。

第三回

リセットに二人が立ち会ってからすでに数日。

毎日のように起こるリセット。複数回観たことで、それに対してある程度の予想は立てられたのだが——あまりにも異常な現象を前に、それでも生徒たちの不安を煽らぬためにその情報自体は隠されている。

だから当然、危険性がわからないという理由で外に出られないこの状況で、唯一可能な娯楽イベントに生徒の関心が向くのは当然のことだった。『はい、そういうわけなので、第二回とわまじラジオっ！ 出力過剰でスタートするよ！』

『始めちゃいますっ！』

生徒たちに情報を漏らせぬ以上、そのラジオをやらないという選択肢は無く、こうして今日もラジオがスタートする。

“うわ、これって確かこのあいだの” “あー……幻覚幻聴じゃなかったか……” “ユーフォリアちゃんは可愛いなあ……！” “

『ああ。せっかくラジオを届けるならば、パーソナリティーにあてがう見目麗しい少女たちは着飾ったほうがいい、と言われたからね』
くすり、と小さく笑いながら口にした通り、幸とユーフォリアの服装は物部学園のものではない。

幸は白いブラウスに膝丈の紺のスカートというシンプルな格好。ユーフォリアの方もシンプルに黒いTシャツと紺のショートパンツでボーイッシュユに。

ラジオを全世界に繋げる直前に着替えた二人の格好は、素材の良さを活かすような形。

『そういうわけなので、今回のパーソナリティーもあだし、ユーフォリアと』

『高柳幸の美人姉妹でお送りするよ』

“前回といい、こいつ自意識過剰じゃね？” “割とマジで美人だから困る” “あの目に見下されたい……見下されたくない？”

“切り抜きしてアップしたいから変な配信じゃ無くて普通に配信してくれ”

『あつはつは、それは無理だね。何せこれはぼくの永遠神剣の力で君たちの魂に強制干渉^{ハツキング}を仕掛けていているようなものなんだから』

『えっと、そういうことなのでごめんなさい。あたしたちのラジオは見て、聞くことはできても見直す、聞き返すことはできないんです』

“ハツキング!?” “え、なんか一気に怖くなったぞ……” “でもユーフォリアちゃん可愛いのでオツケーです” “ユーフィー、俺たちの防御を抜けるくらい強くなつて……”

幸の永遠神剣の力。ユーフォリアがラジオを全世界に届かせる出力を担うなら、幸は声を届けるラジオ部分を担っている。ユーフォリアの出した力に指向性を与える役割。

その基本は永遠神剣間の思念の遣り取り。パソコンなどを利用することでコメントを受け取りながらも、その実パソコンすらも必要ない。

ただ、全世界に向けられた思念が一気に頭の中に入り込んでパンクするだけだ。

『さて、それじゃあ第二回のラジオが始まったわけだけど……』

『正直な話、何をするのかまだ決まってません!』

『という事で、今回は生徒から募集した”やってほしいこと”を書いたハガキの中から選ばろうと思う。あまりにも酷いものはアウトだけれどね』

『スタッフさーん』

傍に控えていた生徒会の役員がユーフォリアの声に応じて、事前に生徒たちから集めていたハガキをまとめた箱を持ってくる。

それにふにやりと笑顔を浮かべて「ありがとうございます!」と元氣よく口にしたユーフォリアにつられ笑みを浮かべたところで、少女を膝の上に乗せた幸のインターセプトが入った。

鋭い眼光で睥まれた生徒はすぐごと戻り、隣の役員に慰められているのだが、そんな光景は目に入っていない視聴者たちは一瞬の殺気にコメントを加速させている。

“うわ、なんかイケメンな……” “百合の男性の方” “かつこ
いー”

『もう、ダメだよおねーちゃん』

『ユーフィーに手を出そうとする輩は全員敵だよ』

“溺愛してる” “初めて意見があったな小娘” “ユーフォリアちゃんの知り合いっぽい人、今日もキレてる……” “なるほど、こういう形でコメントするのか。……久しいな聖賢者” “な、お前は!?” “なんか因縁の戦いっぽいことも始まって……” “賢者(笑)”

流れるコメント欄に心臓によろしくないコメントが見え始めたところで、役員に与えられた箱からユーフォリアがハガキを一枚取り出す。

『えっと、ハンドルネームN・Nさんですね!』

『N・N……あーなんとなく察したよ。大変だねあの後輩……』

『私には好きな人がいます。幼馴染の彼は仮称Nくんとなりますが、Nくんは私の気持ちに気がついてくれません。もしかして私の伝え方が悪いのかとも思いましたが、クラスの友人からすれば私の気持ちは見ててバレバレなレベルらしく、クラスメイトの方でも何やかんやで話題になっています。どうしたら気がついてもらえるでしょうか? ……だって』

『ぼくの想像通りの人物だったら無理、諦めろとしか言えない、かなあ』

『もう、考えもせずにそんなこと言うのはダメだよ!』

『普通なら距離を詰めて告白しろ、って言うところなんだけど……』

今回の相談では生まれた時から幼馴染。距離はもうこれ以上ないほどこに詰まっている。

ならば距離を詰める余地のある外部の人間がNくんに手を出そうとした場合はどうなるのかと言われると、Nくんはやはり気がつかない。

ユーフォリアが読み進めた詳しい内容を聞いて、ポツリと一言。

『こいつ、鈍感ハーレム野郎だろうしねえ……』

『……?』

『真面目に答えるなら、幼馴染ってことでNの方は家族と同じ距離感で見ているのかもしれないよ。もう、こうなると最悪の場合はキスとかしても親愛の証と捉えられかねないので、相手の意識をガツンと変える一手を選ぶのがいいと思うな』

『おおー』

『ただ、その一手の内容次第では即ゴールインってことにもなりかねないことは気をつけておいてね』

『……? それは別にいいことだと思っけど』

『いや、ダメだよ。それは……あー、うん、そうだね』

ユーフォリアに、ここでいう“一手”……要するに責任を取らせなければならぬようなことを教えるわけにもいかず。

少し言葉に悩んでから、幸は続きを紡ぐ。

『自分の好きだって気持ちに気づいてもらって、その好きに対して好きて感情で応えてほしいのに、責任感で応えられるのは嫌だろ
う、ってことさ』

『おおー!』

『ユーフィーも大きくなれば、これくらいはすぐに出てくるようになるよ……多分』

ぱちぱちと拍手するユーフォリアを、純粋な尊敬の目に気恥ずかしさを感じる幸がわしゃわしゃと頭を撫でる。

小学生、あるいは中学生程度の見た目の少女は、精神年齢もまた見た目に見合ったもの。

唯一見合わぬのは実年齢だけ。生まれた時から不老の少女は、今の見た目になるまでにすでに数百年。

時間の流れの規模が違う以上、最終的に彼女の方が恋愛相談、及び恋愛経験の蓄積が多くなり幸を超えて詳しくなるだろうというのは当然の思考。

『うん、それじゃあ次の質問に……といきたいところだけど。無理みたいだね』

“あれ……?” “なんか音が聞こえづらい?” “なんか今変

な音入らなかつた？”

「ザザ、とノイズが走る。」

パソコンをはじめとした機材には不調はなく、それ以外の何かから響いた音の正体は、学校であればあつて当然のチャイム。

『あれ、これって……』

『集合だろうね。……そういうことなので、このラジオを続けてるわけにもいかなかったのだからここで今回は切らせていただきます』

『また今度、ちゃんと配信しますねー』

『というわけで、今回もここ』 未来の世界 “より元の地球へ向けての配信でした”

ぷつん、と映像が途切れる。

スイッチが切られたところで、前回とは違い永遠神剣を召還する形でそれぞれの武具に絡みついたコードを取り外して、二人は生徒会室へと向かうのだった。

この『未来の世界』は、本来ならば来なくてもよかつた世界である。だが、この世界に彼らを導きたかつた敵がいて、その敵を見過ごすことができないうのが物部学園生徒の総意であつて。だからやつてきた、敵となつた最後の生徒を迎えるために。

『未来の世界』に降り立つた神剣使いたちは、普段に比べて格段に降り立つた世界への注意を払っている。

どんな細かな異常も見逃さない、という覚悟で数日の散策。それだけの時間があれば、『未来の世界』で起きている現象が如何なるものか、ある程度の予想を立てることは可能だった。

もとより、敵によって導かれた世界である。

だから、この世界が何も問題などない普通の世界である、なんてことを思っている人間は誰もいなかった。

けれど、一日が終わるたびに住民から記憶を消去される世界だと思っている者もいなかったことは事実で。

「この世界は、一日に満たない時間を永遠に繰り返している世界です」

だから、より詳しい事実……この世界が一体どうなっているのか、どうして住民の記憶が消えるのかを聞いた時、神剣使いが集まった生徒会室が暗い雰囲気で包まれたのは、ある種当然のことだった。

幸にとつては既知の再確認。それ以外の人間にとつては初めて知るこの世界の仕組み。

されど、どちらも浮かべる表情はある程度は似通ったもの。

「貴方達がこの世界の外に出るには、次元鯨を押しさえつける力の源、この世界の繰り返しを成し遂げる力を奪い取らなければなりません」

古今東西、時間を繰り返す所業を行う理由なんてだいたい似通ったもの。

表現の仕方は様々だろうが、一纏めにすれば『より良い未来を追求したい』から。

そしてこの世界に関しては、それはとても切実なこと。

繰り返しを終わらせた先の時間、この世界に待っているのは滅び。

この世界の繰り返す一日は、滅ぶ直前の一日である。

枯れた葉が木より落ちるように。増えすぎた枝を剪定するように。

繰り返しを終わらせればこの世界も、滅ぶ。

「……」

例えそうしなければならないとわかっていても、「はいそうですか。じゃあ滅ぼしますね」なんて言える人間が運良くいるはずもない。

特に、物部学園に集った神剣使いはそのほとんどが世界を守るために戦った者達だから。

お通夜のような雰囲気になったところで、これ以上顔を突き合わせなくても建設的な案が出るとは思えないというリーダーの一言で、解散が言い渡された。

そうして幸は個室に戻ることもなく一人、フェンスに背中を預け屋上から空を眺めている。

考えるのは、この世界のこと。

前世の知識として、この世界がすでに滅んでいることは知っていた。

この世界から繰り返しの原因を取り除かないといけないことも。

「……」

それでも、この世界の人間が普通に生きているとまでは思っていなかった。

生きているのだから、どうにかして助けられないか、なんて思ってしまったっている。

この世界の滅びをどうにかできないか、なんて。

空を、眺める。

星の一つに至るまで人工の光で潰された、地球の未来に近い世界の空を。

世界を渡る巨大な鯨守護神獣と呼ばれるもの。永遠神剣の意思に形を与えた存在。こと〴〵ものべー〴〵の背中に乗った学園の屋上でも、星は全く見えない。

「一つ、聞きたいことがある」

屋上には自分以外誰もいないというのに、幸は言葉を零す。

「気づいていましたか」

「あれだけ気配を振り撒けばどれだけ鈍臭かろうと気づく」

返答は背後から。

幸が背中をフェンスに預けている以上、あとはフェンスの向こう側、足を踏み外せば落ちて死ぬような場所だけだということのに。

けれど、この声の持ち主に限ってはそんなことありえないと断言でききる。

なぜなら彼女は守護神獣。物理法則など気にする必要はない。

振り向けば、そこにはポケットに収まるサイズの少女の姿が。

少女の名は、墮天使ナナシ。ものべーをこの世界へと導いた男、暁絶の持つ永遠神剣の守護神獣であり、リセットという現象について詳しい答えを持って来た存在。

「まあ、いいでしょう。こんな話をしていても仕方ありません。こちらにも、聞きたいことはありませんから」

「ふうん……お前が俺にねえ」

「それで、あなたの聞きたいこととは？」

「この世界について」

「……？ この世界については先ほど語ったことが全てですが」

「この世界の存続は不可能なのか？」

「ええ、尋常な手段では。あるいは、『浄戒』に匹敵する力があればこの世界の繰り返しは続けることは可能かもしれませんが……」

「そんなものはない、か」

「いいえ、ないこともないです」

「なんだと？……いや、まさか」

ナナシによる否定を聞き幸の中に一つの顔が浮かぶ。

この世界がリセットの動力源としている『浄戒』は、幸たちが住まう時間樹……数多くの世界を内包した宇宙の中でも純粋な力としては最高峰。

それを超える力など、この時間樹の中ではそう見つからないが——
外から来た存在ならば話は別。

「ええ。ユーフォリア、と言いましたか。あの娘を使えば、もしかすれば可能かもしれませんよ？」

「いや、それは無理だ」

「おや、試してもないのに無理だと言いつつ切りますか」

「当然のことだろ」

確かに、ユーフォリアならば可能かもしれない。

だが、『浄戒』はこの世界を維持するために世界の中枢に存在するのだという。

ユーフォリアが『浄戒』の代わりにこの世界を維持するとなれば、彼女は永遠にここに留まり続けなければならない。

ならば、それは人柱と何が違うのだろうか。

「いいか。お前は知らないかもしれないが、あいつは俺の妹だ」

ユーフォリアがそう呼んでいる以上、高柳幸はユーフォリアの兄である。

「だったら、俺はあいつの兄貴としてあいつを守るのが当然だろうが。あいつを使わないと滅ぶなら、滅んでしまえばいい」

これが彼にとって大切なものだったならばともかく、見知らぬ世界が滅ぶ程度ならば悩むまでもなくユーフォリアを選ぶ。

できることなら助けたいと思う気持ちに嘘はないが、それも一部の人間に被害が及ばない前提においての話。

女性体になった時に前面に出てくるユーフォリアへの愛情をわずかに滲ませ断言したところで、幸はフェンスから背中を離す。

この世界を崩壊させず、なおかつ他の世界への脱出ができるようになるためにはユーフォリアを犠牲にするしかない、という事実がわかっただけでも幸にとっては収穫だった。

「なるほど」

「で、お前の聞きたいことっていうのは何だ？」

「いいえ、そちらはもういいです。確かめたかったことは確かめられました」

「……そうか」

その言葉を最後に、背後のナナシの気配は消え失せる。

幸もこれ以上この場に留まる理由はない。

屋上という、悩み事がありがちな人間が来る場所からはとっとと離れるとするか、と幸は屋上の扉を開いて――

「うおっ!？」

「あうっ」

「ごん、と開いた扉が誰かに当たった。

「すまん……ってなんだお前か」

そこにいたのはユーフォリア。

開いた扉がぶつかったのか額を手でさすっているの、ちよつと見せてみると幸はその手をどかす。

少女の額に触れた指先にほんのりとした光が宿り、それに触れたユーフォリアが気持ちいいのかふにやりと相好を崩した。

「これでいいな」

「うん。ありがとう、おにーちゃん」

「……で、お前はなんでこんなところにいるんだ。そろそろ寝る時間だろう」

時刻は、そろそろ日付が変わる頃。

物部学園では規律を保つため、一部の例外を除いて就寝時刻も定め

られている。

ユーフォリアは一応“例外”……神剣使いなのだが、それでも幼さを理由にその例外から外されていて。

だからこそ、この時間帯にユーフォリアが屋上にいるのは珍しいことだった。

「えつとね、おにーちゃんに聞きたいことがあって」

「……お前もか」

「もしかして、あたし以外にも誰か来てたの」

「ああ。……で、お前が聞きたいことってのは？」

どうせ、このタイミングで聞きたいというのならば『この世界を滅ぼすかどうか』というところについて聞きに来たのだろう、と。

ユーフォリアの誰が聞きに来たのか、と気にする表情を無視して本題に入ろうとする。

「おにーちゃん、大丈夫かなって」

「……は？」

だから、少女の言葉は本当に意味がわからなかった。

「この皆は世界を守るために戦ってたんだから、世界を滅ぼすってことになった時に大丈夫なのかなって」

「大丈夫だ。問題ない」

「そうなの？」

「ああ。そういうお前はちゃんとできるのか？」

「うん、大丈夫」

この世界に対して、彼らが取れる行動は二種類。

『元の世界』に物部学園の皆を帰すためにこの世界を滅ぼすか。

あるいは、『元の世界』に帰ることを諦めてこの世界が滅びるまで繰り返しに付き合うか。

「物部学園の人は皆いい人だもん。あの人たちが帰れないのはダメだよ」

そして、それを知った上で物部学園の味方をするかを選んでいく。

自分にとってどちらが大事なのかを考え、ユーフォリアはこの世界

を滅ぼすと決めた。

少女にとつては、物部学園の方が「大切」だから。

ユーフォリアは、その大切が元の世界に帰れないというのならば、この世界を滅ぼすための戦いすら選べる少女だった。

「そうか……」

その信念はとても強固。見た目は幼く、精神年齢もまた見た目相応の少女が持っていていいものではない。

だが同時に、生きて来た年月と蓄積された経験は物部学園の誰よりも長い少女でもある。

そんな彼女の信念が幸の言葉一つでどうにかなる程度のものであるはずがない。

だからそれ以上、何かを口にすることはできなかった。

第四回

それは、『未来の世界』の真実が告げられてから二日経った後のこと。

「目的は、とても単純だ。この世界の中枢たるセントラルを落とし、そこにある『浄戒』を奪還する」

生徒会室にて告げられたのは、この世界を滅ぼすという宣誓。

だから今、幸はユーフォリアと二人、走り回っている。

そして、彼らの走り回るスラムの一角で、ぐしやり、と何かが潰れる音が響いた。

「……これはラジオで語れそうにないな」

そう呟いた幸の周りには、無数の人形ひとがたが散乱している。

けれど、一瞥すればそこにまともな“人間”がいないことは誰の目にも明らかなこと。

砕けた肉の中から機械が覗く人形。肉体の末端から黄金の粒子へと解れるように消滅する少女。

機械を宿す者は、男女問わず半身が消え去ろうと「敵を排除します」とだけ口にする。

消滅の最中にいる少女に至っては、髪型や髪色、服装の違いで目立たないがその全てが同じ顔。

「貫うぞ」

まるでクローンか何かのような、ガードナーと呼ばれる少女たちの死骸が消え去るよりも先に、幸に迫り来るのは五色から構成された同じ顔の少女兵隊。

それを目にして少女の亡骸と連動して消え去ろうとする墓標のように突き立つ武器の中から一本を引き抜く。

だが、位階は低くとも永遠神剣。それも少女と対応するようにして生み出されたもの。

当然、主人を殺した幸に無条件で従うはずもなく、握った手から抜け出そうと反発するが――

「やれ、『奏星』」

主人と共に消滅間際のその意思は、捻じ込まれた宝珠から流れ込む強大な意思に一瞬で押し流される。

実行犯は宝珠型永遠神剣、第四位『奏星』。幸と契約した永遠神剣。その力が流れ込んだ次瞬、ガードナーが手にしていた永遠神剣は自我を失い、器は『奏星』の一部に。

シンプルな構造の片手剣、元が非常に低位の永遠神剣なので、強敵と戦えば一撃で粉碎される程度のものだが、急造の武器としては悪くない。

この世界に至るまでの戦闘でガードナー……他の世界ではまた別の名で呼ばれる存在の使う神剣の大体の強度は知った幸は、この程度の相手ならばこれで問題ないと判断する。

そうして、近接戦の準備が整った瞬間、ついに少女たちとの間合いは一瞬で詰められる距離へと至った。

白の少女の支援魔法によって肉体を強化された青の少女が、緑の少女による障壁にて身を守りながら迫る。

青の少女の道行を明るくするため、黒の少女は幸への弱体化デバフを行い、赤の少女が火球を生み出し対処を求めた。

永遠神剣の属性と同じ五色の少女たちが行うのは、それぞれの属性色の特徴を端的に示した攻め。

五つの対応が、少年に同時に求められる。

「そんな程度、効くわけがないだろう」

その連携攻撃コンビネーションとほぼ同時に、幸はマナを己の永遠神剣へと一気に注ぐ。

永遠神剣のあらゆる行動の基礎となるエネルギーを過剰なまでに受け取った『奏星』が戦意高揚し、刀身を燐光で染め上げながら、その光を炎へ変化させる。

白と黒の魔法は邪魔しようのない代物だと切り捨てて、迫る青のガードナーと赤の魔法への対処へと。

「所詮は数合わせの雑魚で、俺たちの邪魔をできると思うな」

交錯の瞬間、青のガードナーの型に沿った一撃が届くよりも先に炎を纏った刀身が少女の矮軀へ吸い込まれる。

緑属性の障壁は、その特徴通り剣による物理の一撃は防いだが、纏った炎による理力……魔法による一撃を防ぐことはできず。

第四位の方から生み出される炎は、一瞬で少女の肉体を黄金の粒子へと変換させた。

その炎の向こうから、ガードナーが生み出した炎が飛んでくる。

「言っただろ、効くわけがないって」

足元に展開されたのは青の魔法陣。

生み出される魔法は、周囲の空間を凍結させていく。

それは迫り来る炎もまた、例外ではない。

「凍てつけ」

器である片手剣が持つ青属性の神剣魔法、サイレントフィールド。

魔法ではなく空間そのものへと干渉する魔法によって、永遠神剣の力によって励起したマナも強制的に鎮静させられた。

ガードナー達の放つ魔法がなかったことにされ、意志薄弱なはずの彼女達が目に見えてわかるほど動揺する。

その瞬間を狙って、強制鎮静作用よりもより強力な働きかけによって再度マナを励起させ、生み出したのは白の魔法陣。

「星の息吹を受ける」

炎へと変化させるのと同じ要領で、纏った燐光が新たな形を生み出す。

神剣魔法、オーラブラスト。ありとあらゆる力の根源たるマナが、精霊光という力に変化し、突風となりて吹き荒ぶ。

巻き込まれたガードナー達に、未来などない。理力に特化した赤属性には突風という物理現象が、物理に特化した緑属性には精霊光が、それぞれ肉体を構成するマナを分解せしめる勢いで喰らいつく。

適切な配分で物理と理力両方に対する防御性能を持つ青、黒、白の三名は、永遠神剣の位階の差でゴリ押し。

突風がやむ頃には、そこにはもはや誰も残っていない。

「……ん？」

そして、一旦戦いが終息したタイミング。遠方にてマナの高まりを幸は感じる。

先ほどまでのこちらとは比較にならないほどのマナの奔流。それが生み出す結末は、当然派手なものになる。

屹立したのは光の柱。飲み込まれた寂れたビルが一瞬にして消失した。

「あいつ、体力配分考えてるのか……?」

解き放たれた光の柱は、ライトバーストと呼ばれる神剣魔法の一種。

マナを感知する力がなくともとても目立つ一撃は、普通ならば敵に居場所を教えるようなものだから好ましくないのだが、今回に関しては話は別。

今の彼らには、これ以上ないほどに目立つ必要があった。

他の誰も目に入らないほどに。

リセットを止める。この世界を滅ぼす。そうと決まったならば、やるべきことは決まっていた。

だが、この作戦を実行する上で考えなければならないことは多かった。

まずは、リセットの存在。

正確には、俺たちがリセットを目撃した際の住民の動き。

リセットのためにセントラルが操った、ということならば、『浄戒』を奪取されそうな場合にも操ることができないか、という疑問。

実際にできるかどうかは問題ではなく、可能性があるというだけでも十分。

神剣使いは唯一無二であるために、物部学園にはごく少数。住民すべてが敵となれば進撃そのものが止められかねない。

だから、彼らが無視できない囹が必要だった。

「おい、まだやれるか」

「うん、もちろん！ まだまだいけるよー！」

その囹こそが、俺とユーフィー。

物部学園に集った神剣使いの集団……『旅団』における最強戦力たるユーフィーと、ラジオの配信にも使用する永遠神剣間での通信能力を持つ永遠神剣と契約をした俺。

常にチャンネルは開いてあるので適宜会話をすることはできるが、そんなことをすれば永遠神剣の反応が向こうでも出てしまうので、基本は終わったタイミングでこちらにタレコミを入れるためのものだ。なので、向こうから終わったという報告が出るまでこちらは戦い続けなければならない。

そういう意味では、先ほどの膨大なマナが費やされたライトバーストは失策だと思っただが、ユーフィーはまだまだ大丈夫な様子。

「よし、なら行くぞ」
「うん！」

愛らしい笑みを浮かべる少女に背中を任せ、マナの高まりを感じて集合する兵士たちをその目に見据える。

ガードナーは、人工的に生み出された神剣使い。人類の叡智では未だ理解の及ばぬものを強引に生み出しているからなのか、天然物の神剣使いに比べて性能が劣化している。

少なくとも、俺の知る限りではガードナー……別の世界ではミニオンと呼ばれるそれらの最高値がどうか通常的神剣使いに及ぶかどうか。

けれど、発生するかどうかは半ば運に頼った神剣使いより、安定して生み出した存在に忠実な神剣使いを生み出せるというのは防衛戦力として優秀だ、というのは目の前の光景を見れば一発でわかることだった。

そして、彼女たちの力を信じて大量に生み出せばどうなるのか、というこども。

「よくもまあ、こんなに揃えたもんだ」

口から出た言葉には、この世界への嘲りが多分に混じっている。

背後のユーフィーが驚く気配を感じたが、こんな言葉が出るのも仕方ないことだろう。

マナが足りずに滅びる世界で、全て同時投入すればスラムを埋め尽

くせるのではないかと思うほどには無尽蔵に湧いてくるガードナー。さらにそこに守護者などという肉体をマナで構成された存在が多数いるのだから、これらを生み出さなければまだ多少は世界を維持できたのかもしれない、なんて。

「言っても仕方ないことか」

そうはわかっていても、言いたくなるのはここが“未来”の世界なのだからだろう。

この世界が陥った袋小路が、どうしようもなく地球が至る可能性を感じさせるから、こうはさせたくないという気持ちが湧き上がる。

「おにーちゃん……」

「なんだ」

「大丈夫……？」

ユーフィーの心配そうな言葉を無視して、生み出したのは十の魔法陣。

そこから射出されるのは、嵐の如くスラムを包む光の殺意。

波濤となつて防御の上から全てを飲み込む八つ当たり。

「天空より響く行軍歌、地を踏みしめる者へ届け！」

放つ寸前、差し込まれるのは澄んだ声。

言の葉に触れた瞬間、魔法陣が膨張した。

「パッションー！」

極限の活性を経て精霊光^{オーラフォトン}へと移り変わったマナが、情熱の名^形を与えられ瞬間的に魔法の熱量を増大させる。

ユーフィーの、第三位永遠神剣による魔法は他の人間が使った時と比べても桁違い。

思わず舌打ちを漏らす。ただの八つ当たりで彼女の力を使わせたことにイラついて、必要のないマナまで込めてしまった。

「あう……ごめんなさい」

「別にいい」

舌打ちのせいで萎縮した彼女だが、その力は絶大と呼ぶしかない。

魔法の威力は通常時の八割増しにまで引き上げられ、ガードナー程度であれば範囲内にいる存在の全てを根こそぎ消し飛ばせそうな程。

そんなタイミングで、異音が鳴り響いた。

「……面倒な」

「あ、おにーちゃんの武器……!」

元凶は、片手剣。よく見れば刀身に罅が入っている。

どうやら、ユーフィーによって強化された魔法の触媒として扱うには負担が大きすぎるようだ。

「問題ない」

「え、でも……」

「そもそも、こいつは武器じゃない」

本体が宝珠である以上、片手剣がいくら粉碎されても問題などない。

戦っている最中に碎けて『奏星』の本体を落とす、なんて隙も面倒なので宝珠を取り外す。

曲がりなりにも第四位の器だったことで得た強度を失い、一瞬で灰に変わったのを見届けて――

「お前はとつとと空に行け」

前方に見えたガードナーを、身を守るための障壁で包み込む。

障壁へと少女たちが一切の攻撃が通用しないと理解しながらも繰り出す光景を見ながら、障壁の内側に魔法陣を多重展開。

第四位の永遠神剣が生み出す障壁によって形作られた領域から彼女たちの力では抜け出すことができず。

かと言って青属性の神剣魔法の特徴とも言える、神剣魔法の消去パニッシュも白属性の魔法には通用しない。

故に当然、ガードナーはその一撃で塵となる。

「……さすが、だな」

そして、それとほぼ同じタイミングのことだった。

空中より追い出された守護者が死骸に変じながら墜落して来たのは。

見れば、ユーフィーが空を舞いながらこちらに向かってくるドラゴンを一撃で粉碎している。

……わかっていたから向かわせたのだが、やはり彼女は俺なんかよ

りもとても強い。

兄として慕ってくれているのはわかっているので、もう少し、こう、妹が頼りにしてくれるような兄になりたいものである。

どこまでも自由に飛ぶ姿をどこか眩しく感じながらも、『奏星』へと意識を集中。

『空の方は任せるぞ』

『……いー うん！ 任せてー！』

神剣間の通信能力を行使し、ユーフィーへ指示を出しながらも視線は一点に。

向いたのは、こちらへと向かってくる超密度のMana反応の方向。

永遠神剣と契約したことで人類をはるかに超える身体能力を体得したガードナーたちであつても比較にならない速度で迫る、何者か。

「そういうわけだ」

捉えたのは、地上ギリギリを滑るように飛ぶ守護者。

ユーフィーが倒すためには空を舞う守護者に一手譲らねばならない高さを維持するドラゴン。

「妹に空は任せた」

精霊光が、宝珠を中心に溢れ出る。

集まる光が俺の意思に従って生み出すのは新たな形。

剣状になつたそれを携えて――

「だから、地上を這うお前の相手は俺だ」

あの子に指一本だとして触れさせはしないと、斬りかかった。

第五回

嵐が吹き荒れる。

永遠神剣の力で擬似的に作られた嵐ではなく、自然に発生する嵐でもない。

龍という災害の化身が、人の胴体ほどもある腕で空間を薙ぎ払ったことで生み出した人為的な自然現象。

爪を避けようと意味をなさない、隙を生じぬ二段構え。

それに対して幸がとつた行動はいたって単純^{シンプル}。

周囲の空間に満ちるマナと同調、並びに掌握^{オーラフォトン}。そして精霊光へと

変換し突風を生み出す。

激突した二つの風は同威力だったようで、触れた端から相手を喰らいあつて消滅する。

そして、風が止むころには幸の姿は正面にはない。

「オオ——ッ」

赤き鱗の龍、守護者レクレドの背後から狙うのは、翼の付け根。

ビルの側面を駆け上がった幸は、乱立する摩天楼の中に姿を隠しユーフォリアを狙う龍種を、まずは己が戦いやすくなるように空の王者としての特徴を奪い去る。

突き刺さったのは重たい一撃。前世の戦闘経験など存在しない彼の一撃は、まるで狂乱したかの如く。

型など存在しない剣撃なれど、爆発を思わせる衝撃が精霊光で構成された刃が触れた瞬間に炸裂する。

痛みに由来する咆哮をあげる龍の片翼は、もはや切り裂いたという形容が相応しくはない有様。

爆裂に巻き込まれたと言われた方が納得できそうな状態になった翼では、片翼が無事だろうと決して飛ぶことはできないだろう。

「グルアアアアアアアアッ!!」

けれど、龍はこの世界を守る者。

この世界と敵対する者は命に代えてでも倒しきることだけをその本能に刻まれた存在。

ビルの二階ほどの大きさを持つ龍に比べて矮小な幸には小回り
で負けていると悟り、振り向いて攻撃を行うという二工程を切り捨て
て、人体には存在しない機関での攻撃へとシフト。
ダブルアクション

「ちいつ……い！」

視界の外から襲い来る尻尾による薙ぎ払いに、咄嗟に精霊光の刀身
を差し込んだが幸は一気に弾き飛ばされる。

差し込んだ刀身に収束するマナは、見る者が見ればただ強度を上げ
たのではないとわかる代物。

オーラフォトンバリアと呼ばれる防御技を剣状に束ね、攻撃を防ぐ
ための刀身にて威力を極限まで減衰させた幸の瞳に映ったのは龍の
姿勢。

口元に収束するマナが次から次へと獄炎に移り変わる様が幻覚で
ないことは、視覚だけではなくマナを感じる第六の感覚すらも告げて
いる。

もはや姿勢を整える時間すら惜しいと、両手で握った剣より左手を
離して守護者へと向けた。

「息が臭い」

だから口を閉じろと宣誓し、幸の手繰ったマナが精霊光となりて彼
の意思を実現させるための形を手にする。

巨大な弾丸へと変化した光が瞬きより早く距離を詰め、レコーレド
の真下から顎門をかちあげるようにして飛び込む。

息吹を放つ瞬間、強引に閉じられた口。体内のマナを錬成し災害と
して放射されるはずのドラゴンブレスは、無理矢理に終わりをもたら
された。

一瞬の怯みの間に再度、ビルの側面を利用しながらの立体的な攻
撃。

精霊光の密度が上がり、強度を高め、切れ味を上昇させての神速の
突きは鱗によって防がれるが、それでも十分。

鱗に通らぬことがわかったのだから、それ以外の場所を狙えばいい
だけのことだと鱗に触れた先端から精霊光を炸裂させながら距離を
取る。

「まずは一発——」

砕けた精霊光の刀身を再構成しながら、それとはまた別に二種の精霊光を同時装填。

体内でマナから練り上げた精霊光が、刀として結晶化した同一の力の表面を這い、内側より新たな力を引き出す。

表面を這う燐光が炎となって刀身を延長させるのならば、内側から漏れ出る光は紫電となって周辺空間を焼く。

「叩き込んでやるかっ！」

蓄積された戦闘経験という意味では、『オリハルコンネーム聖なる神名』前世が神様である』と示すもの。ある意味、これが永遠神剣の契約者という神の転生体の大元であるかもしれない』を持たず、エターナル三位以上の永遠神剣と契約した存在。不老不死に近いでもない幸がもつとも少ない。

だがラジオ配信、並びにその大元である神剣通信を使用する幸は、マナの扱いでは『旅団』の中でもつとも長けている。

それ故に成し遂げられた神剣魔法の複合行使。獄炎の精霊光と紫電の精霊光を同時に纏う彼だけの支援魔法『デュアルレゾナンス』。

「行くぞ、相棒」

『おうー！』

雷炎を剣に纏い、弾丸のように飛び出す。先ほどのように背後を狙うわけでもなく真っ直ぐに。

翼を腕いだ以上相手は空を飛べないというのもあるが、それ以上に背後に回るためにビルの側面を使用する、ということがいちばんの問題。

そうなった場合、途中で走っている、あるいは次に飛び移るビルを破壊するというインターセプトが容易になってしまう。

そして何より——

「妹に無駄な心配をかけるわけにもいかなからなあっ！」

巨大なビルが崩れる、というのは遥か上空で戦うユーフォリアにも目に見えてわかりやすい地上での変化。

そうなれば、心優しいユーフォリアのこと。幸のことを心配するだ

ろう。それだけは断じてゴメンだと幸は唾棄する。

兄としてのプライドが、彼にはあるのだ。

激突。一瞬遅れて衝撃が響き渡る。

吹き飛ぶのは瓦礫だけで、巨大な肉体と真正面から激突しながらも幸は力負けしていない。

それどころか一気に押し込んだことで龍に踏鞴を踏ませ、態勢が崩れたところでいちばん柔らかいと思われる腹へと一撃を叩き込む。

開いた距離は数十メートル。龍であれば一瞬で埋められる程度の距離を吹き飛ばしたところで、刀身たる結晶化した精霊光を一気に砕く。

瞬間、纏っていた雷炎に物質の軛から解放された精霊光が飲み込まれる。

無色の燃料が均等に雷と炎に吸われ、刀身という纏う対象を失った災害は、主人の意思によって龍という屠るべき対象を見据え、津波となって喰らいつく。

「これでまずは一発」

レクターレドが復帰するよりも前に、再度刀身を形成しようとした夕イミングで――

「……………っ!？」

一瞬、死を覚悟した。

小さな咆哮が土煙の中で轟く。

それは王者の宣誓というよりは復讐者が復讐を成し遂げた時のような、どこかねちっこいもの。

だが、体内から放つのではなく、己を構成するマナの一部すらも使つての、己を顧みない一撃は、何よりも空の王者に相応しかった。

空の王者たる己を地上へ墜とした者への天罰だ、と龍は笑う。

けれどこうして罰を与えながらも、己を墜とした者への殺意は消えることなく。この世界の敵としてただけではなく、己の誇りを傷つけたものとして許すつもりは毛頭ない。

それでも、龍は知性もつこの世界の守護者。己の殺意に引つ張られて優先順位を間違えることはしない。

空を駆ける青い彗星を追い立てる同胞への手助けこそが最優先。あれは、同胞がどれほど集まったとしても倒せる気がしない雌の人類型。

土煙の中にいる己の姿は見えず、一撃だけであれば確実な奇襲としてあの少女に当てられるのではないか。

空を飛んでいるから狙いをつけるのは難しいだろうが、それでも不可能ではなく、あの雌を殺すことができるならば――

「おい」

そう考えて、一步踏み出した龍に背後から声がかかる。

とつさに振り向けば、そこには見たことのない雌の姿。けれどどこか先ほど翼を切り裂いた雄の匂いがするような気もする。

ありえない、と目を見開く。耐えるだけならばまだわかる。だが、無傷で切り抜けるのは、こうして目の前に立たれても納得できない。

見れば、手に持った武器もあの雄と同じもの。ならば、目の前に立つ雌こそが先ほどの雄だとどうにか納得をして――

「きみ、どこを見ている」

次瞬、その場を飛び退くが既に遅い。

精霊光を結晶化することでどこまで伸びる刀身が、無尽蔵に注がれたマナによって少女が一步も動かずとも龍にまで届かせる。

鱗に覆われているはずの肉体を、障害など何もないと言わんばかりに切り裂いたその一撃を、幸は視認して、にいつとどこか愛嬌すら感じさせて笑う。

「まったく、あの子は嫌になる程優秀だな」

まあ、そのおかげで助かったのだけれど、なんて。

少女は上空を飛び回る蒼い流星と化した妹へと思考を向けながら呟く。

「おかげで、ぼくもあの子の兄姉として相応しくあろうと思うと大変だ」
通信を通じて流れ込んだ力は、二つの神剣魔法。

一つ目はコンセンションと呼ばれる力。

それは集中力を高め、あらゆる攻撃に対して活路を見出すもの。そうして与えられた極限の時間で、幸は己が活路を見出した。

二つ目は、コンセントレーションによって強化された集中力によって組み上げたもの。

インスパイアと呼ばれるそれは、鬨の声となりて幸を激励し、見出した活路を実現できるだけの身体性能を与える。

神剣魔法単体では性転換する分には足りなかったが、三つの重ねがけによってそれに足る状態になったのはちよつとした誤算だったが。

そんなことは、戦場では一切の関係がない。

(あと使えるのは――)

ちらり、と周囲に視線を向ける。

空から降ってきた、ユーフォリアによって倒されたドラゴン達の死骸。

これら、誰も使用することのない高純度のマナの塊はそっくりそのまま攻防に転用することが可能。

「もう一回聞くとよ」

ぶん、と握った剣を振るえば、雷炎が刀身を包み込む。

ユーフォリアによる集中力の強化は、二種の神剣魔法の同時行使による新たな魔法だけではなく、それとはまた別の神剣魔法を単一で行使できるまでに幸を強化する代物。

その一つの追加によって、先ほどまでと同じ魔法の行使でありながらまるで違う代物のように見えるまでに至った。

生み出された雷炎は結晶刀身を覆うことに違いはない。

けれど、龍の死骸というマナ補給源を得たことで刀身すらも溶かしかねない代物へ。戦闘前に情熱の名を冠する精霊光によって強化された魔法の最大出力に武器が耐えきれていない。

それを振るう肉体も、先ほどまでとはまるで違う。

高位神剣第三位以上の永遠神剣のこの力によって生み出される強化は、幸が生み出す強化とは比較することもおこがましい。

物質と化したことで現実の法則に囚われる刀身が耐えきれないほどの力を、今の幸は引き出すことができる。

「きみは、ぼくの自慢の妹に、何をしようとしていたんだい？」

強化された身体能力で、幸が一気に距離を詰める。

振るった刀は今度は首に吸い込まれるように。

放つ殺意そのものは幼稚なものだが、確実に殺すという鬼気迫る何かがあって、龍すら一瞬萎縮する。

けれどそれが炎の剣閃だというのならば話は別だ。

萎縮は即座に解かれ、レクターレドの瞳に宿るのは大いなる自負。

炎を司る赤属性を与えられた守護者として、この世界に逆らう反逆者の炎に負けるわけにはいかないと吠える。

「うるさいなあ。いい加減に黙って消えなよ」

真正面から戦うのなら問題などない。

それで怪我をしたとしても、ユーフォリアが戦うと選んだ結果として負った傷だ。文句を言える立場ではない。

けれど背後から、あるいは意識の外から不意打ちしようとするならば別。

天真爛漫で純粹無垢な少女を卑劣な手段を以て殺そうなどと、戦場では当たり前のことだろうと幸には我慢できそうになかった。

理由はわからないけれど、あの少女には、そんな卑劣を知らないまままでいてほしい、という気持ちが溢れ、この龍を殺せと叫んでいる。

「面倒だなっ！」

放った一閃は過去最高。けれど、その一撃では殺しきれない。

龍もまた、己と敵対し、この世界と敵対した幸を殺すために、その瞬間に博打に出た。

いつものように空間を薙ぎ払う一撃。放つ一閃よりも、あるいは障壁を展開するよりも先に届くそれを、幸は剣で迎撃せざるを得なかった。

吹き飛ぶ龍の左腕。されど、マナの霧と変わる龍の腕を本体であるレクターレドが吸い込む。

己の肉体の一部を放棄しての一撃。体内に保有するマナを絞り出さなければ放つことができないはずのブレスを、体外に存在する己の肉体を材料に本来よりも短い時間で完成させる。

それ自体は大した一撃ではない。赤き守護者が奇抜な発想で放つたとはいえ、チャージの時間を減らした程度。

幸が押し流されながらも障壁で防ぎきったことからそれはおか
る。

だから、本当に奇抜だったのはその次の行動。

「そんなことまでできるのかいっ!」

体外から吸収したマナを使用しての一撃と同時に、次の息吹の“溜
め”を行う。

凌ぎきった次の瞬間には、さらなるブレス。

舌打ちをこぼしながらも、幸は空から降ってきた龍の死骸の一つに
駆け寄った。

「悪いけど、使わせてもらおうよ」

駆け寄った瞬間、龍の息吹が解き放たれる。

そちらには目をくれることもなく、幸は死骸に刀身を差し込んで。

「行くよ、『奏星』」

『はっ、いいだろう!』

相棒へと声をかけ、一気に死骸をマナへと変えて、その全てを精霊
光の刀身へと注ぎ込む。

膨張する精霊光。先に行った刀身の破壊に似た技ではあるが、あち
らとは違い刀身となった精霊光が注ぎ込まれるマナに形を保てなく
なる。

閃光の如く煌めくマナに指向性をもたせて――

「妹直伝の光の刃だ」

同じ“マナでできた光の剣”を武器とすることからユーフォリア
の意思で繋がれた術理を用いた、幸の新たな一撃の初お披露目。

『奏星』が言う所の彼女への恩。切り札となる必殺技の存在である。

「オーラフオトン――」

雷も、炎も、一気に増幅させて――

「カリバーツ!」

解き放った一撃が、周囲一帯をごとっそりとなぎ払った。

当然、レクレードの存在も。

『……確かにこれは必殺技としては使えそうだな』

(でも、消費するマナが全く釣り合っていないぞ)

周囲に敵がいないのでできる次に湧き出るまでの会話、のはずだったのだが、そこで幸は一つおかしなことに気がつく。

「……って、もしかしてこれで終わりか？」

空から、大量のドラゴンが落ちてくる。ユーフォリアとは遠く離れた場所も含めて。

気になって周囲のマナ反応を探してみるが、そちらにも全くと言っていいほど反応はない。

「おにーちゃん、もしかしてこれって……」

「ああ、そうだろうな」

気がつけば、姿も男へと戻っている。

この世界を滅ぼしたのだ、という実感が湧いてくるや否や、巨大な振動が世界全体を襲い始めた。

「きやつ」

「つと」

「あ、ありがとうおにーちゃん」

「別にいい。倒れそうなら『悠久』にでも乗っておけ」

「はーい……あ、そうだ。おにーちゃんも乗る？ 今から戻るんだし、こっちの方が早いよ」

「……そうだな、乗せてもらうか。さすがにちよつと疲れた」

「えへへ……はーい！」

どこか嬉しそうな返答をしたユーフォリアの手を取って数秒後。世界と戦闘に入ったことで見つかりづらい場所へと移動していた物部学園の元へと青い流星が一つ、空を駆け抜けたのだった。

第六回

『未来の世界を』滅ぼしてから数日。二度目のラジオ配信から一週間経った日のこと。

「あー、マイクテスマイクテス」

「みなさーん、聞こえていますかー?」

向かった先は、前回と同じく配信を行うための部屋。

ただ、前回とは違って『悠久』と『奏星』を機器に繋いだりはしていない。

これでは放送が届くのは通常の校内全域だけになるのだが……今回に関してはそれでいい。

「聞こえてるなら反応くださーい」

「生徒会、校内の様子はどうなっている?」

物部学園のライフラインは全てものべーが担っている学園のライフラインを普通に生活できるレベルで維持して、空には擬似天体を用意して時間感覚を維持し、狙った場所の映像を映し出すことができるとか……こいつ、無敵か?なので、当然電波も作ろうと思えば作れる。

スタッフ枠の生徒会の人たちが伝えてくれた生徒の様子から聞こえていると判断。

「はい、聞こえてるみたいなので、そろそろ始めていくぞ」

「とわまじラジオっ! 番外編!」

「出力低めでスタートします……」

「始めちゃいますっ! もー、おにーちゃんもちゃんとやろうよー。おねーちゃんならちゃんとやるよー?」

そう、今回のラジオは番外編。全世界に届けることで元の地球に届けることが目的のラジオの本筋ではない話となると、それはやはり校内のみを目的とした放送だろう。

「今回のラジオですが、『結局俺たち一度もあの世界に降りてねーぞ』『一体あの世界で何があったの?』という質問が多すぎて捌くのに疲れた生徒会長から、何があったのかを簡潔に説明してくれ、との頼みがあったので発生したものです」

「だから、このラジオは校内だけでいいんですね」

「ああ。ついでに、今回のラジオも俺とこいつだけで進めていきます。語るならスバルさんも連れて来た方がいいんだらうけど……自分の世界が滅ぶまでを詳細に語れってどんな地獄だ、という話になるので」

あの世界は単純に滅びたわけではない。

最後に一つだけ、残せた存在があった。

それがスバル⇨セラフカという少年。とはいえ、今回のラジオには関係ない。むしろ、ラジオの存在意義を考えればこれからも呼ぶ必要がない。

「そういうことなので、これからの番外編ではあたしとおにーちゃん
で『降り立った世界では何があったのか』を語ります。基本はナンバ
リングがある回で『降り立つことができる世界』なのかどうかを確認
するまでを、結局降りることができなかった場合は番外編で語ります
ねー」

「……今回に関しては『滅んでた世界のロスタイムが終わった』、『降り
る間も無く戦闘になった』くらいしかないがな」

「でも、さすがにこれだけで終わるととっても短くなっちゃうので――
――」

「ここからは前回と同じく、全世界配信で」

一瞬溜めた次の瞬間のことだ。

ユーフィーの言葉を引き継いだところで彼女の手元には『悠久』が
現れ、俺の手元には『奏星』が現れる。

二度目ということでも多少は慣れた手つきで、ユーフィーが蒼の槍剣
に様々な機材を取り付けている最中に、一旦全校放送のスイッチを
切って――

『第三回とわまじラジオっ！ 出力過剰でスタートするよ！』

『始めちゃいますっ！』

準備を整えもう一度スイッチを入れた瞬間、その放送は校内から全

世界へと届く範囲が移り変わった。

幸の姿も男の状態から女へと変わり、用意していたパソコンの配信画面には多種多様なコメントが。

“うわ、始まった” “見る幻聴” “聞く幻覚” “あー、困りますっ！ 戦争中にいきなりこれをやられるのは困りますっ！”

“始まった” “やべえ……既に慣れてる奴がいる……！” “ユーフィー！” “うわ、マジでこれ物部学園じゃん”

『戦争中の人には悪いね。いきなり頭の中に映像流されて、耳から入ってくる音がこれってなると、戦場だと思っただろうけど。まあ、安心してくれたまえ、君の相手も同じ状態だから』

『うう……あたしたちで頑張っただけで考えたラジオがちよつと異常な出来事に思われてます……』

『まあ、そこは仕方ないさ。三回目ということで慣れてくれる人が出てきたことの方を喜ぼう。さて、気を取り直して……みなさん、おはよう。あるいはこんにちは、それともこんばんは？ 今回のラジオは、こちらの時間で前回からぴったり一週間で開始しています』

『今回も、パーソナリティーはあたし、ユーフォリアと』

『高柳幸の美人姉妹でお送りするよ』

“なんかここまでくるとホッとしてくるわ” “残念美人” “お姉さん、ユーフォリアちゃんを僕にください！” “ユーフィーは、誰にもやらんぞ……！” “今日もいつもみたいににお父さんが殺意の波濤に目覚めてる” “ユーフォリアちゃん養子にしたいって言ったら妻に『そりゃ別れたらいいことかい！』って締められたぞ” 『あ、この人、多分前回もコメントしてくれたあたしの知り合いっぽい人！』

『いえーい、ユーフィーはぼくがもらったよー』

“ 貴様あつ！” “ 全力で煽っていくスタイル” “ でもユーフィーちゃんめっちゃ幸せそう……” “ ところで、今日の衣装可愛い……可愛い？” “ やってることは全く可愛い” “ 締められた兄貴は早く現実に戻ってきて” “ 嫁さんは現実にいるぞ……？”

『うーん、さすがは永遠神剣由来のラジオ。大体のコメントがこつちに理解できる言語になってる……』

『パパも言語の壁には苦労したって言ってたような詳しくは今現在YouTubeの『悠久のユーフォリア・永遠のアセリア永遠神剣公式チャンネル』で原作者がプレイしている『永遠のアセリア』を見よう！……』

『お、ちよつと思ひ出してきたかな？』

『パパ……あれ、パパって誰だっけ？』

『あちやー』

“ ユーフィー…… ” “ どんまい、お義父さん ” “ うわ、地雷に突っ走ってる…… ” “ ……とここで、今回は何するの？ ” “ そういやそうだな ” “ 前はなんだっけ、ただのミスから始まったんだっけ？ ”

『うん、そうだね。今回からがこのラジオの本格始動だ』

『そういうわけなので、まずはこちらから！』

どん、とユーフォリアが前に出したスケッチブックには大きな文字で“ お悩み相談 ” と書かれている。

“ え、なんて書いてあるのこれ？ ” “ 異世界の言語なんですかねえ…… ” “ 異世界とかマジかよ ” “ えー、異世界も知らないの？ おっくれってるー ” “ こう、ちっちゃな女の子が大きな板を持つてるのは可愛らしく感じるものがあります…… ”

『これは前回も少し触れたお悩み相談だね。基本的には生徒のお悩みの解決のお手伝い、時折コメント欄のお悩みにも対応していくよー』
『というわけで、まず最初のお悩み……と行きたいところなんですけど……』

『実は前回のアレで、全世界にお悩みが発信されるのは恥ずかしい、ということでもまだ相談のハガキが来てません。しょうがないので、今回はコメントのお悩みに答えて行こうかな』

『えっと、個人を特定できるようなお悩みには答えられないらしいです。そこは気をつけてくださいいね？』

お悩み相談と聞いて加速するコメント欄。

ざつと目を通すだけでも大小様々なお悩みが。

『うん、そうだね。こういう質問多いから、先に答えておこうか』

“ ユーフォリアちゃんをお嫁さんにください!”

“ 幸ちゃん付き合つて!”

『答えは両方“いいえ”。ユーフィーはぼくのもの。誰にも渡すつもりはないからね』

『あう……おねーちゃんってば』

『ほら、ユーフィーも言っつていいんだよ? おねーちゃんはどこぞの馬の骨には渡しません! っつて』

『もう……』

“ 百合の花が咲いている……” “ イチャイチャしてる” “ 毎回イチャつくつもりか” “ いいぞ、もつとやれ” “ これは……どっちが嫁?” “ ユーフォリアちゃんの方でしょ”

『そういうわけなので、この質問をしてくる連中はまず百合の間に挟まろうとすると殺されても仕方ないということ覚えておこうね?』

多分、コメント欄のユーフィーの関係者のにも、ユーフィーに手を出そうとしたら殺されるだろうから。ぼくの方は……』

『おねーちゃんにひどいことするのは許しませんよー』

『つてことなので、次のコメントに行こうか。ユーフィーが選んでいいよ』

『う、うん……それなら、これとかどうかな?』

“ 少し前から、家の中に見たこともないペンダントがあります。怖くはあるんですが、見てると捨ててはいけない、という気持ちにもなつて不思議です。どうしたらいいでしょうか?”

『……これは、うーん……うん、別にいいか。要するにこれは“このペンダントが恐ろしいものなのかどうかを判断したい” っつてことではないのかな?』

どこことなく歯切れの悪い幸。

不思議に思つて見上げたユーフォリアの頭を苦笑しながら撫でて、画面の方に向き直る。

『ぶつちやけ、そちらの世界がどういふ状況なのか判別がつかないと

よくわからないけど、とりあえず永遠神剣とかの謎パワーは知られてる？ ……そう、やっぱり知られてないよね』

『永遠神剣絡みってこと？』

『まあ、感情に作用するってなるとそうじゃないかなあ。問題は、それがどっちのパターンなのかってことだけだ』

“パターン？” “ ……どこかで聞いたような話だな” “これ、精神を操ってるようなものだから恐怖の域だろ” “割と重たい相談で草すら生えない”

『二つ目は、普通にストーリーカー目的で永遠神剣パワーを使ってるってこと』

『もう一つは？』

『相談者さんがもともと大事にしてたけど、永遠神剣関係のせいでのペンダントに関わることを全部忘れてるってパターン』

“うわ、えつぐ…” “忘れられてる側も忘れてる側も…”

“これ、エタール案件では…？” “エタール？” “永遠神剣関係の言葉は理解できんぜよ”

『エタールになっちゃうと、世界の外に出た瞬間に存在そのものになかったことになるからね。どこかのエタールがエタールになる前に相談者さんと知り合いました、ってことになるのもうどうしようもないのさ』

『うーん……これ、どうするのおねーちゃん？』

『……うん、そうだな。ちよつと相談者さんの知り合いに巫女さんとかいたら、その人に聞いてみるのもありかもしれない。時折、そういう謎パワーを発揮する立場の隠れ蓑として神職やってる人もいたりするから』

『えとえと、ごめんなさい。ちゃんとした答えをあげられなくて』

“ いえいえ、問題ないですよー。あとで聞いてみますね”

『……あ、本当に神職の知り合いいるんだ』

『えっと、もしもあたしたちがそちらの世界にお邪魔することがあったら、その時にもう一回相談に乗りますね』

『うん、それじゃあ次のお悩みに行こうか。一番重要なやつだね』

“物部学園はいつになったら地球に帰ってくるの？　うちの子ども一緒にいなくなってしまうって……”

『これって保護者の方、ですよね？』

『そうだろうね。……正確な答えは“わからない”です』

『え、これを読めばいいの？　うん、わかった。……今、学園の方では前回から一週間の時間が経過しました』

“え？　こつちだとまだ三日なだけど……” “こつちはまだ二日” “そもそも一時間も経ってないぞ” “は？　一ヶ月過ぎただけだ”

『と、まあコメント欄にもある通り、時間の流れは世界ごとに様々です。そのため、いつになったら帰還できるかは謎なのですが——』

『やらないとダメな要件はあと二つ、だよな？』

『うん、そうだね。えー、今現在、物部学園は未来の世界を出発し、次の世界に向かっています』

『次の世界に、元の地球から物部学園がなくなる際にいなくなった人がいる、とのことなのでその人を捕まえたら元の世界に戻れるらしいですねー』

『これが終わると、ようやく元の地球がある座標を探すことができるようになります』

『今までは、元の地球の座標が見つかってても他の生徒を探してる間に地球の位置が移動したりしてたんですよね？』

『おう。……です。で、ようやく帰還の目処が立ってきた、ということですよ』

『といったところで、今回の配信はここまで！』

『お、もうそんな時間か』

『うん、未来の世界の崩壊時のことでゆーくんがちよつと疲れてるみたいで』

『そういうことらしいので、ユーフィーが言った通り今回はこれでお開き。今回の配信は、世界と世界の間の空間からお送りしました』

『聞いてくれてありがとうございます〜』

次の世界は、名付けるならば『枯れた世界』。

『未来の世界』が滅びを認めなかった世界ならば、『枯れた世界』は滅んだ上で何かを残そうとした世界。

物部学園が降りることになる、二つ目の『滅びた世界』である。

第七回

「んあ……」

くおおおん、というもののベアの鳴き声で目を覚ます。

精霊光の操作練習をしていたはずだが……いつの間にやら胡座をかいたまま眠ってしまったようだ。

だが、頭が働かない、などと口にしていない時間はない。

ものべーが鳴くとは、つまり事態が動いたということなのだから。

「……こいつ」

当然、何があつたのかを確かめるために生徒会室に向かうべきなのだが、それよりも先にやらないといけないことができてしまった。

眠っている間にも体表を流動していた精霊光をマナを捉える第六感で“視”れば、それは俺の体だけではなく膝上に座っていた少女にも。

「おい、起きろ」

「……わっ、おにーちゃん!?!」

ぽん、とユーフィーの耳元で精霊光を小さく爆発させれば、すやすやと無防備に心地よさそうな寝顔を浮かべていた少女は突然の爆発に目をパチクリとさせる。

完全に身を委ねてくれるほど信頼してくれているのは嬉しいのだが、こうして寝ている間に滑り込まれるのは少々心臓に悪い。

「え、えへへ……」

誤魔化すような笑いにため息をひとつ。

「いいからどけ」

「むう……はい」

「それと、とつとと着替えろ。ものべーが鳴いた」

「え、それを早く言っよー!」

なぜか、俺が『ぼく』になっている時の服を着ていたユーフィーが着替えをするので、その間にこちらも後ろを向いてさきつと着替えてしまう。

懐かれている、という自覚はある。

ユーフィーのことを思うなら、できる限り関わらない方が双方にとって幸せであろう、ということも。

彼女はエターナルで、こちらは神剣使いではあるがただの人間。最後は必ずさよならが待っていて、こちらは忘れるだけだから問題ないが、向こうは忘れ去られる側だ。

俺がエターナルにならない限り、その事実^{マナ}は死ぬまで付き纏うわけ
で――

「ままならんな」

その事実を踏破するには運命を越える必要がある。

それも、高位の永遠神剣に見初められる形によって。

己の前に敷かれた運命というレールから逸れるには、レールの上を走るしかない自分ではなく、レールを横からガツンと破壊してくれる何者かが必要なのだ。

だから、自分一人ではどうしようもない。

「何がー？」

「……なんでもない。着替え終わったならとつとと行くぞ」

呟けば、いつの間^{マナ}にやら着替え終わったらしくユーフィーが隣で首を傾げている。

誤魔化すように歩き出せば、「待ってくださいよー」なんて口にしな
がら少女がまた隣に。

二人並んで向かう場所は生徒会室。着替えに無駄に時間を使った
ので、おそらく俺たちが一番最後。

そのことがわかつているのかいないのか、ユーフィーは少しだけ急
ぎ足。

「この世界はどんな世界なんだろうね？」

「少なくとも、ラジオで話せるような世界ではないだろうな」

少女の言葉に返答しながら、ちらりと窓の外に視線をやる。

そこに広がるのは、乾いた大地と赤茶けた空。

虚無を感じさせる風が砂を運ぶ。石がからんからんと虚しく音を
立てながら転がって行く。

世界の内側で発生するあらゆる行動が、一切命の息吹を感じさせな

い。

「ここは、『枯れた世界』。

『旅団』にとっては敵、そして物部学園組にとっては学友である暁絶の出身世界にして、すでに滅んだ世界。

俺たちが見ることのなかった、『未来の世界』が至るべきだった滅びの後を具現した世界である。

「おにーちゃん、頑張ろうね！」

「……おう」

会議は、とても簡単に終わった。

この世界が滅んでいるという事実が、これ以上ないほどに単純な作戦以外を余分なものとして切り捨てさせる。

すなわち、暁絶を追う攻撃組と、ものべーの守護に回る防衛組。

固定されているのは、暁絶の親友にして『浄戒』の正式保有者である世刻望が攻撃側ということのみ。

そうして分けられた中で、幸とユーフォリアはまたもや同じく防衛組に。

滅んだ世界である以上、この世界でガードナーをはじめとしたマナ存在は生み出すことはできない。

そういう意味では、敵が暁絶ただ一人のこの世界で『ものべーが狙われる』ということを考える必要はないのだが——

『光をもたらすもの原作における序盤の敵組織。原作が始まったのも、この組織が物部学園にガードナー……正確にはミニオンを送り込んだことで原作主人公が覚醒したから』……だっけ？」

「ああ。そういえばお前はあいつらとは会ったことがないんだっけな」

「うん、もう壊滅状態だっけ聞いたけど……」

「ああ、それであってる。幹部格……神剣使いはともかく、ミニオンはもうほとんど残っていない。そんなあいつらがこの状況で一発逆転を狙うなら、ものべーを狙う以外の選択肢はない」

外部から持ち込まれるというのなら話は別だ。

『未来の世界』に至る一つ前の世界、『魔法の世界』と呼ばれる世界に全戦力を突入させた『光をもたらすもの』は、もはや壊滅寸前。

そんな彼ら彼女らがスバルとユーフォリアを新たに加えた『旅団』に勝利しようと思うのなら、まず確実に戦闘能力のない生徒たちを人質に取る必要が出てくる。

「ほら、行くぞ」

「うんー」

ユーフォリアを連れて、幸が向かうのは屋上。

ものべーの上で、この世界を一番よく見渡すことができる場所。

ものべーには鏡を通しての遠視能力が備わっているが、見たいと思った場所しか見られないという弊害もある故の、全方位を見渡すことが出来る場所への通信能力持ちの配置。

「まあ、そうは言ってもここに来ることはないだろ……」

だが、幸は今回この力が働く可能性は低いと思っている。

『光をもたらすもの』の首魁が如何に切れ者だったとしても、それを操る者が復讐の機会を狙う怨念であれば意味をなさない。

まず確実に、復讐相手がいる攻撃組の元へと向かう、という見込み。

「え、来ないの？」

「……ああ、多分な」

とはいえ、そんなことを口にすればなぜ知っているのかという詰問に変わる。

なので幸が口にできるのは、すでにある情報を組み合わせたの推論のみ。

「あいつらだって、さすがに防衛に人を割いていることくらいは予想できるはずだ」

「うん。あたしたち以外にも、スバルさんとかがこっちにいるよね」

こちらに居るのは、機動力が高い、あるいは遠距離攻撃ができる面々を中心に。

生徒たちを守りながら、けれど彼らに戦っているということを感じづかせないための面々。

「一匹でもミニオンを通せば誰かが殺されるって状況なんだから、防衛に比重を置いているのは当然だろう」

「だから、人が少ない方を狙う？」

「ああ」

だから――

「こういうのは頭がおかしい例外だ」

口にして、振るったのは宝珠を核として精霊光で編まれた輝剣。

狙ったのはユーフォリアの頭上。上空数千メートルの高さ。

周囲のマナとの同調、変換。マナが一瞬で精霊光へと移り変わり、刀身を延長させる。

次の瞬間、万象切り裂くはずの精霊光がせき止められたのは超高空に存在する何か。

輝く刀身を止められる何者かなど、迷うまでもなく神剣使いに他ならない。

永遠神剣という超常に遠心力を乗せた、などと現実的な威力上昇は同じレベルに至って初めて意味をなすもの。

重要なのはマナの量と密度。そういう意味では、咄嗟の一撃など見るに耐えないものではあるのだが――

「行っていい」

「うん！」

敵手を撃ち落とすための足場として使うのならば話は別。

幸の肩を蹴り、跳躍したのはユーフォリア。

そのまま、光の足場と化した刀身を駆け上がった。

他者を傷つける属性を与えられた精霊光の上を駆け昇るという常識の埒外にある疾走。

兄の作った足場が自分を傷つけるはずがないというユーフォリアの信頼に幸が応えたことで、少女は自らが生み出す光の刃へと全てのマナを集中させることが可能だった。

「最大の力を、最高の速度で――」

眩くのは、記憶の中にはない言葉。

無意識の内に漏れ出したその言葉は、だからこそ彼女の心根に根付

いた言葉だと言えるだろう。

少女が父より習った、基本にして奥義。

「最善のタイミングッ」

視界に入った武士然とした男へ向けて、意識の隙間を縫うように光の軌跡が放たれる。

父より受け継がれた意思が技という形を以て具現したその一撃。

エターナルの出力から放たれる、あらゆる防御を間に合わせないそれは、けれどすでに実行されている防御まではなかったことにはできない。

「ぐっ、ぬうううっ！」

だから、その一撃では命を刈り取るまでは行かなかった。

マナを皮膚に被せることで実現させた鉄を超える硬度が、ユーフォリアの一撃の威力を減衰させて男の命を救う。

幸がその隙に物部学園の護衛として残った神剣使いへと通信能力を起動して、状況を報告する。

今の状況、各員の居場所を知りその上で――

『落とせ』

『うん、任せて！』

ユーフォリアへと落とすべき場所を告げる。

その男……『光をもたらすもの』が一員、ベルバルザードに空中を飛翔する手段はなく、だからこそその一撃は回避不可。

少女の背に生まれた光輪ハイロクが翼へと変じ、男を追って刃から跳躍した少女は加速を経て追いついた。

「やああああああっ！」

ベルバルザードを叩き落としながら、ユーフォリアも追従するように落ちていく。

空を自由に飛び回ることができる少女は、その実力も相まって遊撃兵のような役割。

近接戦を主とする少女が叩き落としたのは、スバルの持ち場。

物理と理力の片方にのみ特化した防御技をそれぞれ一つずつ持つ相手には、どちらの攻撃も可能な遠距離支援に特化した神剣使いの元

へと向かわせるのがいいという判断。

スバルが持つ永遠神剣は第六位『蒼穹』。マナを矢として放つ、弓型の永遠神剣である。

「ふう……」

それを見送り、幸はため息をまた一つ。

来ないだろう、と言った直後に来たからではなく、空の彼方から降り注いで来たから、というのが理由。

「あいつら、こんなことを考えられる程度の頭はあったのか」

それに追従するように、周囲にミニオンの群れが出現したことを感知して驚く。

ミニオンをものべーの周囲に展開し、そちらに皆がかかりきりになったところでものべーの内側に神剣使いを送り込む、そういう作戦。

生徒を人質にとる、という意味では理想的な作戦なのだが――

「まあ、意味なんてないが」

それは、神剣使いの反応を感知し、通信を行う力を持った幸がいなければの話。

範囲に入った瞬間に、幸はその存在を感知することができる。

だからこそその先手であり、周囲に出現したミニオンとの間に発生した闘争の気配を感知しながら、幸はさらなる敵軍の存在を探す。

「……本当に苦し紛れの一手ってことか」

だが、ミニオンの気配は感じられない。

すでに壊滅寸前の組織。全戦力を注ぎ込まなければこの規模の作戦を展開できなかつたということか。

闘争の気配も、ユーフォリアが向かった場所以外は徐々に縮小していく。

時間にして数分程度。だが、それだけの時間、神剣使いを一人フリーにすれば、生徒の一人や二人を人質にする上では何一つとして問題がない。

とはいえ、それも成功すればの話。この世界では成功しなかつた、ただそれだけの話だった。

「……………ん？」

そうして、ユーフォリアのいる場所での闘争も終息の気配を見せ始めた頃。

範囲内に攻撃組の神剣の気配を察知して。

「……………やっぱりこうなったか」

そこに、本来あるべき人数より一つ少ないことを理解した。

見知らぬ神剣の反応がそこにはあって、当初より物部学園にいた神剣使いの反応が一つ消えている。

「それで、お前はどうする？」

「……………」

声をかけたのは背後。

そこにははつきりと見えない何者かが立っていて――

第八話

異世界に飛ばされた当時、物部学園に残っていた生徒会役員の一人が、こんこんと軽く扉を叩く。

やって来たのは、神剣使いに割り当てられた個室の一つ。

ダンボール箱を抱えた少年は躊躇しながらも「失礼しまーす」と小さな声で。

「高柳ーいるかー?」

入ってみれば、部屋の灯りはついたまま。当然、中にはその部屋の主人もいた。

だが、部屋の中心に胡座をかいて座っているその少年の頭はうつらうつらと揺れている。

——ああ、疲れてんのか。

悟り、できる限り音を立てないようにしながら、周囲を見渡してダンボールを下ろす場所を探す。

ぐるりと周囲を見渡した瞳が捉えたのは、抱えたダンボールを置くことで埋まるのではないかと思わせる空白。

御眺え向きに設えられたそのスペースにダンボールを下ろしたの

だが——

「げっ……」

思わず、声が漏れる。

ゆっくりと置いたはずだったが、ここに持つてくるまでに腕が疲弊していたのか、半ば落としたも同然にどすんという音が鳴った。

起こしてはいないか、と恐る恐る背後を振り向けば少年も、そして少年に抱きつき、抱きしめられている少女も眠ったまま。

ふう、と一つ安堵の息を吐き、できる限り物音を立てないように歩き出す。

「んあ……」

そうして、その生徒会役員が扉を閉めた音で、幸はこれまでにないほどの快眠から目覚めた。

なぜか部屋の電気が消えていて、しかもユーフォリアと抱き合っ

いる状態。

確か、精霊光の操作練習をしていたはずだけど、などと困惑しながらも暗闇に慣れた目で抱きしめているユーフォリアを見れば、すやすやと心地好さそうな寝顔を無防備に浮かべている。

「まったたく、こいつは……」

眠りながら頬をすり寄せる形で甘えてくるユーフォリアの応対をしながら、見つけたのは少し離れた場所にあるダンボール。

殺意、あるいは物部学園全体への害意によって置かれたわけではない、とは幸にもわかる。

次に思い浮かんだのは、ユーフォリアに好かれている幸を快く思わない生徒からの嫌がらせ。ただ、それもないだろうと切り捨てる。

下手なことをすれば『中に敵がいるかもしれない』というレベルの大事になり、自分の活動にすら影響するかもしれない。それならば真正面から向かってくるだろうし、実際に何度か何人かの男子生徒は幸に特攻してきた。

「……まあ、いいか」

ならば良かった、あのダンボールの中身はなんだろうか。などという疑問は放棄してしまう。

あるいは、精霊光にて視力を強化すれば、暗闇の中でもダンボールの中にあるハガキに書かれた文字を読み取れるかもしれない。

だが、わざわざそこまでする必要はない。特別急いで確認しなければならぬもの、という線はまずないだろうと幸は思っている。

そんなものならば、現在学園を仕切っている生徒会長か、あるいは『旅団』のリーダーに渡されるだろう。

故に、膝上に座っているユーフォリアごと覆っている精霊光に対して維持以上の干渉をすることはなく、ぎゅつと強く抱きしめながら目を閉じる。

「……おやすみ」

——これ、この旅が終わった後にちゃんと眠れるのか……？

ふと、幸の頭の中を疑問が過ぎった。

この旅の終わりはイコールでユーフォリアとの永遠の別れ。

彼女がエターナルで、幸が人間である以上、この旅が終われば、次に会った時にはまた『初めまして』になるのが運命である。

彼女が抱き枕となっているこの状況での快眠を知ってしまった以上、ユーフォリアの記憶と記録が消え去った世界で、眠っても満たされないのではないか、なんて考えが一瞬だけ脳裏を過ったが。

その疑問に答えが出るよりも先に、幸の意識は落ちていくのだった。

「第何回か忘れたけれど、とわまじラジオっ！ 出力過剰でスタートするよー！」

「始めちやいますっ！」

「……なんで俺はここにいるんだ」

“男!?” “え、なんか新しいのいるんだけど……” “待って——誰だお前!?” “男のくせにそこに入ろうとか、頭おかしいんじゃない?” “男だ、吊るして差し上げろ”

突然のラジオ、というわけではない。

ダンボールの中にあつたのは、大量の『ラジオをしてほしい』という嘆願書。

『枯れた世界』にて一名が攫われたという状況の中で娯楽を行うのはどうか、という意見もあつたのだが、いなくなっていた一名も戻ってきて帰れると思ったタイミングで、さらなる航海。

彼らの息抜きも必要だろう、ということを実行することになったのだ。

「もー、みなさんそんなひどいこと言っちゃダメですよー」

「まあ、仕方がないさ。ユーフィーとぼくのラジオだと思ってたら、他の人が追加されたんだから。……うん、今回は見ての通り、三人。ぼくこと高柳幸と」

「あたし、ユーフォリアだけじゃなくて！」

『百合の間に挟まる男の刑』の受刑者、略してゲストである暁絶くんが美人姉妹に追加されましたー。……男を混ぜるんだからと去勢し

ようとしたけど、さすがにそれは許されなかったよ」

「……いや、本当になんで俺はここに呼ばれたんだ」

“ どう略したらゲストになるんだ???” “ あ、ラジオの被害者でしたか……” “ ユーフィー！ その男から早く離れろー！” “ お

義父さん荒ぶってる” “ なんでこの人呼ばれたのー？” “

「えつとですぬー……なんでしたっけ？」

「うるさい、黙れ。俺が知りたい」

「ぶーっ！ おねーちゃん、あたしこの人嫌いっ！」

「はいはいよしよし。あとで彼が同性愛者だって広め……これはもう知られてるか。なら、ロリコンだってちゃんと広めておくからねー」
「おい待て、なんだその不名誉なあだ名は。というか同性愛者とはどういうことだ!?!」

「いや、だって君、親しい友人が世刻だけじゃないか。彼の周りの綺麗所には一切反応しないで、世刻ばかりに構うから、学園中で君がホモだって言われてるし、彼もまったく反応しないからホモ扱いされてるけど?」

「ホモ……?」

「ユーフィーは知らなくていいからねー」

いつものように抱きしめたユーフィー、その頭の上に顎を乗せれば、何が嬉しいのかきやつきやと声を上げる。

横で暁がホモ呼ばわりに物申したいという顔をしているがどうでもいい。

だから、その代わりに暁のホモ疑惑に対しての不平不満を口にする輩が出てきた。

「待ちなさい。マスターがホモなはずがないでしょう。というか、ホモなのかロリコンなのか、はつきりとしてください」

「……ナナシ、その言い方だと俺がロリコンだという発言への否定がないぞ」

「い、いえ別にマスターがロリコンだと言っているわけではなくて……」

“ !?” “ わー、可愛い!” “ お人形さんみたい!” “ こんな

にちつちやな女の子にマスター呼びさせるとなるとロリコン呼ばわりもしょうがないわな……”

暁の持つ永遠神剣、永遠神剣第五位『暁天』の守護神獣、ナナシ。皮肉なことに、彼女が暁の性癖を否定するために出てきたことで、暁ロリコン説が補強されていく。

ぶーたれてるユーフィーを甘やかしながら、コメント欄に対して文句を口にする暁を押しつけてラジオの開始を宣誓する。

「はい、それじゃとりあえず今日も今日とて相談いくよー」

「あれ？ おねーちゃん、相談のハガキはもらったの？」

「いいや、もらってないよ。ラジオをしてくれって言いながら、ラジオに送るハガキを用意しないのはどうかと思うので、次回以降は生徒諸君はちゃんとラジオのネタを用意するように」

「お便り待ってまーす」

「さて、そういうわけだからコメント欄に相談を乗せてもらえれば拾うかもしれないよー」

“ よつしや、相談のお時間だー！” “ ユーフォリアちゃん、お嫁さんになってー！” “ 異端者だ、処せ” “ 俺たちが思っても言わなかったことを……”

「あつはつは。ユーフィーはぼくのものだってちゃんと以前言っただろう？ ……お義父さん、この人たち相手にオーラフォトンノヴァぶち込んでもいいよ」

“ 誰がお義父さんだ！ ……って、なんでオーラフォトンノヴァを知って？” “ オーラフォトンノヴァ（笑）” “ すつごい厨二ネーム……” “ うっ（中二病時代を思い出して即死）” “ 流れ弾は草”

「ユーフィーが寝言で言ってた。ふっふっふ……ユーフィーの寝言を聞けるんだよ、ぼくは。ユーフィーのことだし、お義父さんと一緒に寝ててもおかしくはなさそうだけど」

「どうなんだろう？」

「まあ、記憶が戻らないとその辺りはわからないよね。……って、おつと、ちゃんと応えないといけない疑問が来たっばいぞ？」

“ またラジオが始まった、ということはおもうじきに帰ってくるというのでいいんでしょうか？”

「あー、うん。これはね、ちよつと……暁、説明は頼むよ」

「何故俺がしなければならぬ」

「ほら、本当ならもう帰れたのに、まだ帰れていないのは、君を追いかけることになったからだからね」

「それはあいつらが選んだことだろう。少なくとも理想幹神エデガ・エンプル並びにエトル・ガバナの2名のことを指す。正確には時間樹の管理を任されている神が自称しているだけ。を追いかけているのは俺のせいじゃないはずだ」

「もー、そういうこと言っちゃダメですよ。あなたのことを思って皆が選んだんですから」

「誰もそんなことは頼んでない」

“ うわ感じ悪っ ” “ ええ……せつかく助けに来てくれたのこれには…… ”

「それじゃ、ここで一つ。こいつ、仲間になったタイミングで『俺は別にお前たちと一緒に行く理由はない』でも、一緒に行った方が理想幹神を倒しやすいだろうから』とか言ったんだよ。親友もいるところだ」

“ リアルツンデレかよ ” “ 男のツンデレとか誰得？ ” “ このツンの対象は、もしやさっきのホモ疑惑のセトキなる人物では……？ ”

“ ゴクリ…… ” “ とこころで理想幹神って何？ ”

「理想幹神は、俺の故郷を滅ぼした連中だ」

“ !? ” “ いきなり重いのが来た ” “ 突然重い設定をぶつ込んでくるのやめろ ”

「今は、そんな耄碌した爺共に以前相談を出して来たN・Nさんが攫われてしまったから、助けに行く最中だよ」

“ 誘拐! ” “ ええ…… ” “ これは……薄い本が厚くなりますね ” “ 思い人がいるのもいいね ” “ NTR好きがこんなにたくさん…… ”

「でーん、はいアウトー。お義父さん、この人たちにノヴァ落とし

てー」

“ は？ なんで俺が？ というかお義父さんと呼ぶな！”

「ユーフィーのNTRとか考えてるかもよー」

“ 殺す”

「NTR……？」

「あなたは知らなくていいことだと思います」

「そうそう。実際に起きないことは気にしても仕方がないよ。ユーフィーはもう、ぼくの魅力にメロメロだもんねー？」

ぎゅーつと抱きしめると、「えへへっ」と嬉しそうな声を漏らす。

背後から抱きしめているのがとても口惜しい。ちゃんと顔を見られず、配信画面上にだけ浮かんでいるのが残念だ。

“ 今の配信で、以前のN・Nさんというのが誰なのかわかってしまったんですけど……高柳先輩、あのキスもつまりそういうことって考えていいんでしょうか？”

「お、望か」

「そうみたいだね。それじゃ、親友の恋路なんだから君が応えてあげるといい」

「えー、この人にちゃんと答えをあげられるんですか？」

「……暁のことが嫌いなのはわかったけど、少しは隠す努力をしよう？」

「これまで、俺がどれだけ望の女性関係を見て来たと思ってる」

“ うわ、いきなりの『俺以上にあいつを知ってる奴はいない』マウ

ント” “ でも内容が『女性関係』” “ これはまぎれもないツンデレですわー”

「……貴様ら」

「じゃ、大丈夫そうだしこの質問はお前に任せるわ」

このタイミングで彼はN・Nさん……永峰希美の恋心に気がついていたのであるか、とふと思った。

原作的な物言いをするのであれば、今は第7章。実際のヒロインが決まるタイミングで言えば第8章か、第9章あたりだろう。

ならば、すでにこの時点で恋心に気がついている、というのは一体

『違い』として判断していいのだろうか。

この違いが、下手なことに繋がらなければいい、と。

『枯れた世界』で何者かの接触があつたからだろうか。

すでに違いがあるにもかかわらず、初めてそんなことを思った。